

五月十六日の晩の月夜に、自分の病室を脱け出して、家の周囲にある樹に細引を掛けて、それに縊れて二十七歳で死んだ。その素質に於いては稀に見る詩人であり、思想家であつた、北村君の惜む可き一生は斯うして終つた。

北村君は明治元年に小田原で生れた人だ。阿父さんは小田原の士族であつた。まだ小さな時分に、両親は北村君を祖父母の手に託して置いて、東京に出た。北村君は十一の年までは小田原にゐて、非常に厳格な祖父の教育の下に、成長した。祖母といふ人は、温順な人ではあつたが、實の祖母では無くて、繼祖母であつた。北村君自身の言葉を借りて云へば、不羈磊落な性質を父から受け、甚だしい神経質と、強い功名心とは母から受けた。斯ういふ氣風は少年の時からあつて、それが非常にやかましい祖父の下に育てられ、祖母は又自分に對する愛情が薄かつたといふ風で、後に成つて氣鬱病を發した一番の大本は其處から來たと自白して居る。明治十四年に東京へ移つて、そして途中から數寄屋橋の泰明小學校へ這入つた。透谷といふ號は、この數寄屋橋のスキヤから來たのである。私も小學校の課程は、北村君と同じ泰明小學校で修めた者だが、北村君よりはるその弟の丸山古香君の方を、その時代にはよく覺えてゐる。北村君は

方々の私立學校を経て、今の早稻田大學が専門學校と云つた時代の、政治科にゐた事もあつたと聞いた。當時の青年はかう一體に、何れも政治思想を懐くといふやうな時で、北村君もその風潮に激せられて、先づ政治家にならうと決めたのだが、その後一時非常に宗教に熱した時代もあつた。北村君のアンピシヤスであつた事は、自ら病氣であると云つたほど、激しい性質のものらしかつた。さういふ性質はすつと後になつても、眉宇の間に現はれてゐて、或る人々から誤解されたり、餘り好かれなかつたりしたといふのは、そんな點の現はれた所であつた。うと思ふ。まだ二十位の青年の時代に或る時は東洋の救世主を以て任ずるやうな空想な日を送つて、後になつて、餘り自分の空想が甚だしかつた事と、その後起る失望、落膽の激しい事に驚いた、と書いたものなどもある。或る時は又一個の大哲學家となつて、歐洲の學者を四ませようと思つた事もあつて、その考へは一年の間も續いて、一分時間も腦中を去らなかつた。かういふ妄想を、而も斯ういふ長い年月の間、頭腦の裏に入れて置くとは、何といふ狂氣染みた事だらう、と書いたものなどがあるが、頭腦が悪かつたといふ事は、時々書いたものにも見えるやうである。北村君はある點まで自分の Brain Disease を自覺して居て、それに打勝たうく

と努めた北村君の天才は恐るべき生の不調和から閃きを發して來た。で、種々な空想に失望したり、落膽したりして、それから空しい功名心も破れて——北村君自身の言葉で言へば「功名心の梯子から落ちて」——さうして急激な勢で文學の方へ出て來るやうになつたのである。北村君は石坂昌孝氏の娘に方る、みな子さんを娶つて、二十五歳(?)の時には早や愛兒のふさ子さんが生れて居た。(斯の早婚は種々な意味で北村君の一生に深い影響を及ぼした。)北村君は思ひ詰めてゐるやうな人ではあつたが、一方には又磊落な、剽逸な處があつて、皮肉も云へば、冗談も云つて、友達を笑はすやうな、面白い處もあつた。前に出版した透谷集の方には寫眞を出し、後に出した透谷全集には、弟の丸山君の書いた肖像畫を出したのであるが、北村君をよく現はすやうなものが、残つてゐないのは残念である。北村君は大變聲の涼しいやうな人で、私は北村君の事を思ひ出す度に、種々な書いたものを讀んで聞かせたり、その時々話したりした聲が、今だに耳についてゐるやうな氣がする。晩年には服裝なども餘り構はなかつたし、身體は何方かと云へば瘦せぎすな、少し肩の怒つた人で、髪などは長くしてゐた。北村君の容貌の中で一番忘れられないのは、そのさもパツシヨンに燃えてゐるやうな、そして又考へ深い眼

であつた。

明治年代の記憶すべき、大きな出來事の一つは、士族の階級の滅亡である。その階級が有てる凡てのものゝ滅びて行つたことである。その士族の子孫の中から北村君のやうな物を考へる人が生れて來たといふことは私には偶然で無いやうに思はれる。猶、新時代の先驅者たりし北村君に就いては、話したいと思ふことは多くあるが、こゝにはその短い生涯の一瞥にとどめておく。

黒船

黒船——歴史小説としても、歴史畫としても、面白い題目ではあるまいか。私はこの秋、木曾に旅して、姉の家であの船の圖を見出した。半紙一枚程の大いさの古い粗末な木板畫だが、それを見ると當時のことも想像される。いかにあの船が當時の人の眼に映じたらう。そのため

に幾何の人が狂死したらう。

黒船の姿を變へたものは、幾艘となくこの島國へ着いた。

しかしまだ足りない。トルストイにせよ、イブセンにせよ、一般の眼にはまだ幽霊だ。吾儕はもつと黒船の正體を見届けねばならぬ。そして夢を破らねばならぬ。吾儕は事々物々現代の西洋に接觸しつゝあるとはいへ、まだ間接たることを免れない。

歴 史

現代といふものを研究すればするほど、過去の歴史に書いてないことの澤山あることが分る。過去の歴史を読んで見れば見るほど、現代の真相もある程度までしか歴史の上に傳はつて行かないやうな気がする。

今の教育は、あまり歴史上の人物に重きを置き過ぎる。いかに古人に傑れた人があつたとい

へ、要するに過去の人である。吾儕とは何等の直接的な交渉もない人である。古人を友とすといふこともあるが、それは自己を見出し得るにとどまる。吾儕に取つては、例令平々凡々でもそこらを歩いて居る男や女の方が、昔のエライ人達よりも大事だと思ふ場合が多い。斯うして互に生きて居るといふは、どれほど大切なことだか知れない。

清少納言の『枕の草紙』

『枕の草紙』は、何といふこともなく雑然書並べてあるやうに見えるところから、一概に隨筆集として了ふ人もあるが、しかし普通の意味で言ふ隨筆集とは餘程趣が違ふ、あの中に書いてあることは、すべて精しい觀察から成立つて、短い描寫と描寫とが無數の星のやうに連なつて居る。あの中には極くく短い描寫もある。それから、殿上生活のすぐれたスケッチとも見るべきものが、ところ／＼に挿んである。左様いふ短いものと長いものとが連なるともなく連な

つて居る。

清少納言がすぐれた感覚を有つた人であることは、斯の雑誌で印象主義の話が出た時に一度私も話した。當時の宮殿はすべての物の中心で、そこへ種々な人が集つて、互に殿上生活のカルチュアを経るうちに、自然と其間からあふふ感覚を養ひ來つたものであらうと思ふ。『枕の草紙』の中に、宮殿の廊下のところへ女房達がよく集つて、往つたり來たりする用事ありげな男を眺めたり、人の噂話をしたりすることが書いてある。タイプこそ違へ、あの時分には種々な面白い人が居て、共通に發達したところを具へて居たらうと思ふ。

單に色彩の感じ方から言つても、あの時代の人達がよく遣取した歌を書く紙の色と、添へてやる花や葉の色と、それを束ねる紙の色との調和などを思ふと、随分精しいところまで行き渡つて居たものらしい。清少納言はよく男や女の衣裳の色のことを書いて居るが、それを讀んで見ても、重ねて著た色や、透いて見える色の濃淡の感じなどが想像される。斯の話を一度和田英作君にしたら、和田君は畫家としての立場から見ても、彼の時代の人達には驚く、すつかり

西洋近代の色調の法則に叶つて居る、と言つたことがあつた。

『結縁の八講』を夏の朝早く聴きに行くといふ一節はすぐれたスケッチの一つである。あの中に、説教を待つて居る上達部が同じやうに赤い紙の扇をつかふことが書いてある。それが瞿麥アキアキの咲いたやうに見えたと形容してあるのは、なんでもないことのやうだが、好い感じがする。斯ういふ一寸した點にも、清少納言の女らしい感覚の働き方が思はれる。

ある人に言はせると、今更印象主義などとヤカマしく言ふ程のものはない、遠い昔に、一貴婦人の手によつて、『枕の草紙』のやうなものが書かれたではないかと。吾儕は斯ういふ人に答へる手間で、吾儕自身の祖先の中に Realistic な素質を見つけ、印象的な傾向を見つけ、發達した感覚を見つけない、左様いふ文學に、物の内部までも洞察する力だとか、人生を深思する力だとか、伴なつて居ないとしたところで、別に吾儕は失望するにも及ばない。祖先に無いものは、子孫が得れば可い。

極く簡短な形容詞である種の文學が言ひ盡せるやうに思ふことは、吾儕は取らない。例へば、『源氏物語』は暢達だとか、『枕の草紙』は簡勁だとか、よく一口に言つて了ふ。吾儕は斯うい

ふ先入主となつた観かたから離れたい。

女の一生——廣く言へば人の一生を思はせるやうなところが『源氏物語』にはある。豊富な言葉づかひや微妙な陰影の多い感情を言ひ表はすに適した文體にも感心する。しかし、試みに『源氏物語』の一部を取出して見ると、紫式部の文章には何處か斯う感じに一般的なところが有る。言葉をも更へて言へば、『白氏文集』などを愛誦したといふ彼の時代の人達が誰でも普通に感ずるやうな感じが、紫式部の花やかな筆で書かれたといふところがある。それに比べると、清少納言の方には個人としての色をもつとよく出て居て、物の観かたも直接だ。清涼殿の隅の障子に荒海の繪があつて、その中に恐しいやうな手長足長の畫いてあつたことが、『枕の草紙』に出て居る。あの一節の描寫などは、短くはあるが、吾儕に吾儕自身の過去つた忘れて居た記憶までも喚起させる。屋根の高い、木立の古めかしい宮殿の方へ中宮が移つて住んだ時に、母屋には鬼がゐると言つて、南の廂に几帳を立てたといふあたりの記事を読んでも、左様いふ日常の何でもないやうなことに、殿上生活の光景がよく出て居て、吾儕にいろ／＼なことを思はせる。

清少納言は奈何な人であつたらう。たしか紫式部の日記には、あまり褒めては無かつたかと思ふ。しかし人物評などは思ひ／＼のものである。それに、褒めないだけの各自の氣分といふものもあれば、その時々の場合といふこともある。假令他が『出過ぎた女だ』と言つたからとて、吾儕まで左様思はなければ成らぬといふ筈は無い。

清少納言が才學だてに過ぎたとか、操行が足りなかつたとかいふ非難は、よく聞く。書いたもので想像すると、どうも斯う時々ハシヤギ過ぎるやうな、興に乗じて物をするやうなところがあつて、左様いふ點で多く誤解を招いたかと思ふ。郭公を聴きに行つた途中で卯の花を折つて、それで車を飾つて歸つて來たといふ話などは、いかに物に興ずる人であつたかゞ解る。『蘭省の花の時錦帳の下』とある下の句に、『草の庵を誰か尋ねん』としかも火鉢に消えた炭で書いて差出したのが評判に成つて、殿上の貴公子達は誰も／＼あの即興の句を扇に書きつけて持つて居たといふことが、清少納言自身の筆で記してある。あゝなると、酷くハシヤイだものだ。一體清少納言の歌にはあまりすぐれたものも無いやうだが、あの時代の人達が手本のやうにし

た『白氏文集』からして吾儕には感服されない。斯ういふ多くの人中で心の張りつめた時を去つて、獨り廂の間から空を眺めて居るやうな清少納言を見よう。

廂の間が、風にも、雨にも、風情の多かつたことはよく書いてある。中宮の恩と意氣とに感じて、この人の爲には何處迄も盡さうといふ、いかにも氣象の強健な清少納言は、所謂『一人』といふ言葉でも解る。その點に於ては、男子に對しても一步も譲らない程の意氣込であつたらしい。清少納言の多くの行爲や、紫式部の評などに對しては、斯の中宮といふ大きな背景人物のあることも思つて見ねばならぬ。左様いふ背景を離れた時に、吾儕は廂の間だの、女房の部屋などで心のノビノビとした、洒落な、何處か寂しい清少納言を見出す。

七月の暑いさかりに、風通しの好いところへ鮮やかな敷物を敷いて、几帳も奥の方へ片付けて置いて、獨りでサツパリとした物を著ながら横に成つて見たといふことなどが書いてある。私に面白く思ふのは彼様いふところだ。

『枕の草紙』で清少納言の特色をよく表はすものは、彼女が戀愛の消息であらう。吾國に戀愛

に關する文學は澤山ある。それは多くの場合に、熱した色を帯びたものである。清少納言の如く、冷く、短く、戀愛を語つた人はすくなからうと思ふ。

頭辨(行成)に關した記事を読むと、最もよく解る。二人の情人が互に苦み、互に憎み、又互に愛しつゝある深き消息が、手短かな描寫の間に窺はれる。

中年の戀といふことは一時友達仲間と言ひはやされて、種々な意味のある言葉と成つた。清少納言の書いた戀愛には、中年同志の冷笑がある。溜息がある。

もし『露西亞文學に於ける實際と理想』といふやうな書物を吾國で書く人が出来て來るとすれば、左様いふ人は平安朝以後に續いた國內の戦争の影響を見逃さないであらう。『枕の草紙』などに表はれたやうな、快活な、のびのびとした吾國の婦人の美質は、あれから以後の文學には見られない。吾儕の先祖は、實に長い長い間、争鬪を事とした。海外との戦争ならば異なつた文明を輸入するといふこともあるけれど、國內の争鬪は互に精力を銷盡したのみだ。壯丁は死し、婦性は蹂躪せられ、唯武勇の名のみが残つた。家庭の組織や結婚の制度なども次第に變つ

て来た。文學は暗い憂鬱な寺院の内へ隠れて了つた。
吾國には、頼山陽のやうな名高い歴史家が居て、あれほど國內の戦争を記し乍ら、その影響に就いてはあまり注意を拂はなかつたといふことは、不思議なやうな氣がする。足利とか北條とかの治世のある時期を除いて、徳川時代に入るまで、吾儕の先祖は眞實に休息する暇も無かつたやうなものだ。

歌や日記を残して行つた名高い婦人のことと言つて見ると、例へば千代女などは一生を俳諧に託した程の女で、旦那と祝言する時にも『澁かろか知らねど』と吟じたといふ位だから、面白い人には相違なかつたらうし、すつと遡つて『十六夜日記』を書いた阿佛尼などはマアザアツドに於ては豪いところが有つたらうと思ふ。しかし、清少納言の時代から以前のことと比べると、女の文學はイヂケたやうなものに成つて居る。岩疊な體格と長い壽命とを持ちながら、女は弱いものなどと言つて嘆くといふは、後世に成つてからのことで、遠い昔の婦人は左様ばかりでも無かつたらしい。吾儕はもう一度眼前に清少納言のやうな人を見たい。

観ることゝ書くこと

吾儕が物を観る場合には、多くは先人からある定まつた観かたに據るものであるから、左様いふ先入主と成つた観かたを離れて物を観るとなると、必ずそこには何人も未だ氣付かすに見逃して置いたことの發見せらるゝものである。

斯ういふ立脚地から、世の中に同じ物は二つと無いそこを見定めなければ成らん、と説いた人がある。

物を観るといふことに依つて、自己の革命を企て、新しい進路を開いて行つた人は少くない。不斷の努力を續けた觀察者の生涯に對しては、吾儕はすくなからぬ尊敬の念を持つ。そして、左様いふ態度を持ち續けることの奈何に難いものであるかを想はざるを得ない。

吾儕の諸器官は生活に必要な程度に於て發達して居ると言はれる。斯も矛盾の多い、複雑な、作理の無いことで満たされたやうな人生の中にあつて、絶えず物を觀つゝ進むといふことは、

容易で無い。左様いふ風にして訓練されて行つた精銳な器官は、奈何いふ生活を營むに適するであらうか。そこを思つて見ねばならぬ。吾儕は、美しいことも、醜いことも、愚かしいことも、狂じみたことも、總てありのまゝに來て影を投ずる明るい鏡のやうな心を持ちたい。是は難いことだ何故といふに、一度吾儕に映じた影は、鏡の如く拭ひ去られるものでは無いからである。

先入主に成つた老を離れた物を觀ようといふやうな態度を押詰めて行つたら、その人は奈何なるだらう。冷然として自己の破壊に對する觀察者の運命こそは傷ましい。あるひは一種の社會觀を作つて、自己の觀察を統一せずには居られないやうな人も出來て來るのではあるまいか。しかし物を觀るといふことは各自一様では無い。吾儕は相異なる器官を有し、相異なる本能の發展に依つて、各自の生を營みつゝある。そこで、斯の物を觀るといふことが、それを押進めて行く人には、極めて特有な世間觀を抱かせるやうな場合も出來て來る。そこまで行くことが出來れば、則ち一生面を開いたものだ。『文章世界』記者から募集小説の選を頼まれた時、自分は投書家諸君に、

『物を書くことは、よく物を觀ることだ。又よく物を記憶することだ。』
と勸めて置いた。自分は書くことだけを特に切離して考へたくない。物は觀えさへすれば、書ける。それを書けば、よく物を觀ることが出来るやうにもなると思ふ。

オスカアル・ワイルドの言葉

オスカア・ワイルド曰く、

『私は心から自己實現の清新なる様式を求めて居る。私が現在の要求はこれである。而して先づ第一になさざるべからざることは、世間に反抗せんとする苦い反撥の感情を脱し去ることである。』

これ程反抗の精神に満ち溢れた言葉を、めつたに私は見たことが無い——しかも自由な感情の發露と、多分な涙のかどやきとを以て。

愛

世人は唯愛するがために愛する。愛の意味を知ることこそ藝術家の本分である。

藝術家

藝術家が黙して他の非難を受ける場合には、人呼んで卑怯だとか臆病だとか言ふ。藝術家が黙して他の賞讃を受けても、誰も卑怯とも臆病とも言ふものが無い。

思想

吾儕が夢を見る、眼の覺め際には長い間かゝつてそれを見たやうな氣がする。其實吾儕が夢見るのは極く短い間であると言ふではないか。吾儕の思想とは、矢張斯くのごときものでは有るまいか。吾儕は朝から晩までかゝつて、それを考へ續けて居るやうに思ふけれど。

人生のハアモニイ

日本人の藝術は多く單音のやうな氣がする。メロディそのまゝのやうな氣がする。どうかして複音を伴ふところまで進めて見たい。そこまで行つて始めて人生のハアモニイが味はれる。

吾儕の缺點

西洋の作家が手に成つた創作と言はず、批評家の批評と言はず、一個人の傳記でも可い、その一つを取り來つて、注意して見ると、一種名狀しがたい客觀性の光輝ともいふべきものを帯びて見える。其特質は、一文一節の末にも見出すことが出来る。これはそも／＼何故だらう。一夕、友人の、Y君京都大學の教授S君の二人とあるところに夕飯を共にした。私達の話は東西の學問や藝術の比較に移つた。其時、吾儕日本人は學問に於ても藝術に於ても敘述的であつて、智力的でない、といふ點に三人の話が一致した。左様だ、これが吾儕の大なる缺點だ。

大 家

大家とは何ぞや。世人は斯の稱をみだりに藝術家に與へて置いて、いつでも後に成つて後悔

して居るではないか。これは酷だ難有迷惑な話と言はねば成らぬ。よしんば人が吾儕を大家と呼んだからとて、吾儕自らまで大家と思はなければ成らぬといふ法は無い。

靜物の世界

靜物の世界といふものがある Still Life とは面白い言葉だ。もし私の空想を許すなら、斯世には靜物の地獄もある。その地獄では、ダアキンも、ルウソオも、皿や林檎と何の異なるところが無い。

自 由

眞に人の自由な時とは、努めずして自由な時だ。オスカアワイルドの口吻をかりて言へば、自由を想像するに止まらずして、それを實現する時だ。

外界と自己

外界のことを思ひ煩ふ勿れ。先づ自己に力を得よ。さすれば外界のことは自然と解決がついて行く。

社 會

社會は晚餐によりて維持せらる。

厭世家の養生

兼好法師曰く、「四十にして死なんこそ、めやすかるべけれ」と。

斯くいふ兼好の隨筆には、奈何にして住まうとか、奈何にして食はうとか、そんなことが頻りに書いてある。芋を食つて萬病を治したといふ坊さんのことまで書いてある。世を厭ひながらも、尙且つ生きんことを志した。厭世家の養生——いかに矛盾に満ちた斯の生涯だらう。

今日の教育

今日の教育は青年の爲の教育である。多くの學者は青年の教育に忙しくて、自己を教育する

暇が無い。青年の爲、青年の爲——朝から晩まで青年の爲だ。左様言ふ大人の爲には、何等の教育の設備が無くても、誰も不思議だと言ふ人も無い。

市川團十郎の言葉

故人市川團十郎が帝國議會の傍聴に出掛けて、歸つて來て人に言つた言葉に、議員諸氏は平常の事を議するにも彼様な大きな聲を出して居るが、もし非常の場合に臨んだら奈様な大きな聲を出すつもりだらう、と話したとか。

河

ある人にとつては、河は一定の形と色とを有する水の流である。ある人にとつては、一定した形もなく、一定した色もなく、流動して際涯の無いやうなものである。斯ういふ人の目には赤い煙のやうな色の河といふものもある。同じ河でも見る人によつて斯様な相違を生じて來る。

子供と大人

どうも彼はまだ子供らしくて困る。どうかしてもつと大人に成りたいものだ、とある友達に話したことが有つた。すると、その友達が言ふには、「左様ですか、私はまたもつと子供に成りたいと思つてますよ。」と。

科

學

Y君は高級の官吏である。斯の友人が訪ねて来て、往時のやうに文學上の話を始めた時、私は今日の青年の氣風を形造るに與つて力あるものは科學ではなからうかといふことを持出した。英漢數などを主として教へた吾儕の共立學校時代に比べると、科學が學問の課程に入つて來た頃から、青年の氣風が一變したではないか、と言出した。今日の文學が恐るべき影響を青年に及ぼすと言ふ人もあるけれど、左様いふ人達が科學を諷刺するとは酷しい矛盾ではあるまいか、と言つて見た。

往時「野邊のゆき」の歌を作つた若いY君ならいさ知らず、今日のY君は一も二もなく文學の味方をするやうな人でもない。Y君は私の説を否定して、青年の氣風を變へ觀察眼を左右するほどに日本の科學が勢力のあるものだらうか——それほど精神的に——譬へば幾多のバザロフを生ずるほどに、吾儕の科學が根柢あるものだらうか、と答へた。

そこで私はY君に、そんなら長崎あたりから流れ込んで來た往時の蘭學の影響を君は奈何思ふか、シイボルトが生んだ子供は則ち渡邊華山とか高野長英とかの人達ではないか、それで

も西洋の科學が精神的に及ぼす影響を否定するだらうか、と言つて見た。Y君は、それは認めが、でも彼の頃の書籍といふものは上梓される部數に限りあつて、今日の文學書類のやうに普及される性質のものでは無いと答へた。

斯の問題を私は話し合つたまゝで別れた。京都のS君と三人一所に成つた時にも、斯の話が出て、S君はY君の説に賛成することだつた。兎に角、斯の話は私達の間には問題として残してある。

「露西亞印象記」

斯書が出版された時、私は中澤君へ宛てた手紙の中に、「私達の探して居たやうな批評はこの中にある。露國の印象は直にルシアン・ライフの批評……兎に角、君は忙しい手間で、大變好いことをして呉れた……」

と書き送つた。私は上司君への用事の手紙の端にもこのことを書きつけた。

『露國印象記』の原書が出来たのは千八百八十七年——フロオベルが死んでから七年後——今から見れば二十五年前にも成る。ある記者はそれを指摘して、必ずしも斯の譯書が今日の露西亞の國情に適切なものでは無いといふ意味を示した。尤もなことだ。けれどもその爲に斯書が有する價値は變らない。讀者は斯書によつてプシキンやゴオルやドストイェフスキイや、一方に於てはヘルツェンやツルゲーネフの立脚した位置を知り、又「平民の中に行く」人達の行方をしのぶことが出来る。

中澤君の譯が出版されたのは二月の下旬だから、其後私は新聞や雑誌に出た批評を注意して見て、いかに斯の書が吾讀書界から迎へられつゝあるかを知り、且つ嬉しく思つた。これは知友の手に成つた翻譯だからと言ふばかりで無い。

斯書の原著者ブランドスが私淑したといふテーチのことを思ふと、「ノーツ・オン・イングラント」として英譯されたものゝ有ることを想ひ起す。「根本に於いて、一國の主要なるものは人である。」とは、テーヌがあゝの英國印象記とも言ふべき書籍の中に述べた言葉だ。テーヌは斯の見

地に堅く立脚して、それには藝術家の眼を以て見、又科學者の眼を以て見ようと思ふと言つて居る。斯くして彼は英國人の中に種々なタイプを見出し、廣い複雑な觀察を極く簡素な言葉で言ひ表した。ブランドスの『露國印象記』は全體に於てテーヌの遣り方によく似て居る。唯テーヌが事々物々佛蘭西を引合に出して居るところは、比較の様式を離れないやうな氣がして煩しいが、ブランドスにはそれが無い。一層鮮明で、一層進歩的な方法に據つたものゝやうに思はれる。それは兎に角、『露國印象記』の原著者がある佛蘭西の批評家の跡を追うて、觀察の根柢を「人間」に置いたことは争はれない。

斯様なことを私が言出したのは、一つは吾國の事情に照し合せて、批評といふことが思出さるるからである。過去に於て、逍遙、鷗外の二先達が如何に吾文學を開拓して行つたかと言ふに、批評家としての逍遙氏は記實といふことに重きを置き、鷗外氏は美學に立脚地を置いた。逍遙氏の記實はやがて史的批評——もしくは史實を基礎とした批評を産み、鷗外氏の美學は幾多の藝術論の親と成つた。けれども批評の領分は廣いそこで透谷君のやうな人も出て、人の心の革命を叫び、別の眼を見開くことを企てた。中澤君は『露國印象記』に序して「イブセンがブラン

デスに寄せた書簡の中に、「眞に必要なものは人間の精神の革命である」と言ふ句がある。この詞はイブセンを解すべき金言であると同時に、またブランドスを解すべき金言である。」と言つて居るが、わが若い透谷を解すべき金言も矢張これに外ならない。そして透谷などがまだあの短い、息の切れるやうな戦ひも開始しない前に、外國には既にブランドスのやうな男が落着き拂つた力のある足跡を露西亞の土に残して來て、斯ういふ幅廣な印象記を書いて居たかと思ふと、驚かされる。

斯う言へば私は矢鱈に西洋を難有がるやうにも聞えるが、決して左様いふ意味で言つて居るのでは無い。維新の政治的革命的革命に依つて統一せられた吾儕日本人は最早薩摩人であり長州人であり將た征服せられた關東の人であるといふ墻壁を感じない。そのかはり吾儕の精神は不思議な不統一を感じて居る。吾儕は日本人であると同時に、ある者が英吉利人の如く、ある者が佛蘭西人の如く、あるものが獨逸人、露西亞人の如きは、現在の教育ある社會に於ける状態である。吾儕は西洋の文明に對しては甚だ謙遜な生徒である。好いと思ふものは何でも眞似る、何でも受入れる。そしてある時は輕佻な、唯手先の器用な國民の如くに思惟する。吾儕は自ら動くこ

とのみを知つて、自ら判断することをしない。ブランドスのやうな批評家があつて、批評して欲しいと思ふのは斯の吾儕の知識生活の状態だ、吾儕のライフだ。私は嘗てある雑誌記者に、『自由な批評の精神は決して文學上の作品にのみ限らるべきものではない。』と話したことがあつた。實際、作者と作品を見てのみの批評ばかりが、批評ではない。觀察の根柢を「人間」に置いた批評もあつて欲しい。そこから作品中の人物の位置をも批評して欲しい、そしてもつともつと吾儕の眼を開けるやうにして欲しい。

私が探して居たやうな批評は、斯の『露國印象記』の中にある。しかもそれが極めて豊富な形で、ラベのやうに溢れ出て居る。私が中澤君の勢を感謝し、斯の書を多くの讀者に勧めたいと思ふのも、その點だ。

二十五年前の露國印象記——それが今日に譯されて吾儕に種々なことを教へるとは、何たる謎だらう。

素朴で、そしてわざとらしくなく碎けたところを兼ねた、隨處に適應して少しも不自由を感じないやうな可撓性に富んだのが、中澤君の文體だ。その譯筆は私達の心を先づ亞細亞から歐

羅巴へ通ふ驛路へ連れて行く。そして露西亞の隣の上といふ場所に立たせる。「區毎にその趣が變り、大都會のやうな所もあり、城下のやうな所もあり、全くの田舎町のやうな所もある。」とは莫斯科の町の光景を敘した一節だが、讀んで行くうちに、自分等の都會の縮圖でも見せつけられるやうな氣がする。父を最上の権力者とした家と、その大きな自治區と、更にそれを大きくした國家とは、いかに吾が家族制に似て居るだらう。極端と極端との結合、獨創と模倣とを同時に有する矛盾、これら露西亞人の特性を見て行くと、途中で私達は「一體、これは誰のことか。」と言つて見たく成る。

「何れの國民にも優つて他國民の思想を解し、是を模れ、是を自家の所有にする能力を有つて居るものは露西亞人である。開化した露西亞人は絶えず諸外國の最も新しい流行思想を了解してゐて、古く安價になるのを待つ暇がない。その文化はありとあらゆる最新なる物の香を帯びた新人を造る……」

ブランドスは、露西亞人の同化力を百姓の手細工の中にも見出して居る。彼は斯の露西亞人の性質の可撓性を評して、「露國の天才が模倣的になり、外國の物を受け容れる能力の有るのも斯の可撓性の爲だ。恠いふ點から見ると露西亞人の同化力には又一種の獨創がある。獨創の缺乏その者がやがて一の新しい獨創の基となるのだ。」と言つて居る。斯ういふ批評から吾儕は實

に多くのものを學ぶ。

豊富なブラブデスの觀察は、土地の單調な、氣候の變化の劇しい所に住むといふ露西亞人の生活の中に、種々な隠れたものを見つけて居る。溫和と醇朴との樂みの中に結び付けられた疎野と魯鈍との悲み……深い無智と迷信……亞細亞的屈從心……堅忍不拔の性と露西亞一流の消極的勇氣……

彼は新時代の青年に就いて、斯様なことも言つて居る。

「然し是等の敏捷で快活な青年と、彼等がその爲に働かればならない人民との間の懸絶は如何に甚しからうとも、それは獨自の道徳生活を營む「インテリゲンチヤ」と全露西亞の行政權と物質上の所有權を掌握する官僚生活との間の懸隔ほどにははげしくない。」

省思させられることの多い言葉ではないか。

私は「文章世界」記者に做つて、文範の一例として、中澤君の譯文をすこし讀者に紹介したいところが有る。面白い挿話の趣のある左の一節のごときは、觀察あり、ユウモアありで、私の讀むのを樂みにしたところだ。

「その後幾許もなく、五十年祭好きの露西亞で、演説やら祝電やらで、老海洋畫家アイマソプスキイの

爲に同じやうな祝賀會が開かれた。「彼は露西亞の藝術を今日の位置に上げた」
 怒う言つて感謝されて居る。彼の名聲の原因は恚うである。露西亞人で海に詳しい者は至つて動ない。海を見たことのない者すら珍らしくない。で彼の畫の前で批評や判断の出来る者が無かつたのだ。彼も若い時代には立派な畫を描いたであらうが、老年に成つては唯それを反覆したに過ぎなかつた。丁度菓子屋がワツプルを造るやうに海を畫を作つた——即座に温かく新しいのを……。」

それから、波蘭人に比較して、露西亞人の奇妙な性癖の取合せを見せて呉れる中に、一種の露西亞型——あの音楽好き、自信の強い物質主義者を引張り出して來た條なぞは、譯者が自分では言はうとして言つたことかの如くに露ひを帯びて見える。

「然かし斯様な大膽な、公開した物質主義にも關らず、この男が十二分な物質主義者になれるにはまだ遠かつた。もし彼が全く空想的の素質を缺いて居たならば彼は代表的露西亞人とは言へない。チエルスシエエグスキイの「何が爲さるべきか」といふ書物が彼の聖書であつた。その本の革命的理論と内容は古い社會の傳習に對抗して彼に眞理を示した。口にしそ出さなかつたが、彼の靜かな思想のなかで、彼は兩性間の關係の改善を要求して居た形式の宗教や道徳を遙かに後方へ棄て、來た新時代の人に適當な自由の發展することを望んで居た。で、彼のかやうな精神生活の中には、社會的理想郷が日陰と夕暗のなかに萌さし、花咲く一隅もあつたのである……。」

私は斯の書を新しい思潮に漂はされて居る人達や、文學好きな青年に勧めたいばかりでなく、

年をとつて思想の變つて來たやうな人達にも、官吏にも、政事家にも一讀して貰ひたく思ふ。官僚派もしくは、國粹派の人達も斯の書を繕くならば、自己の位置を知る上に於て、又若い時代の精神と希望とを知る上に於て、必ず得るところが有らうと思ふ。世界的であると同時に國民的な、極端な、急進主義と極端な保守主義との同棲する、勇敢な戰鬥性を具備しつゝ尙且つ世界に於て最も平和を愛するといふ露西亞——その國に浮沈する人達の知識生活の批評は一つとして吾儕のライフを反映する明徹な鏡面でないものは無い。國民的自尊心の鼓吹者と言はれたカトコフ社會上及び文學上の問題に關し容喙することを禁じられつゝあるといふ大學の教授等、これらの人達は何となく吾儕自身の中の影のやうな氣もするではないか。

「一體に露西亞の著作家は、青年でも老人でも、泥酒の癖をもち、金錢問題には不始末で、修養を缺いて居る。毎日泥臭い沈鬱な生活を送つて居る。ある者は夢酒とシャンパンと女に耽溺して、定まつた家庭さへ持たない、自由と幸福とに達すべき凡らゆる希望の失墜、人生の限りない不幸の感想、國家や人民の爲に盡すべき手段の閉鎖——是等のものが彼等を驅つて淵に陥れ、その絶望を忘れる爲に強て彼等をして無自覺の生活を求めしめるやうに成つた。」

——勿論是等の作家は極く狭い社會しか知らない。またその修養も至て限られて居る。で、上流社會に知己が無ければかりか、一種の猜疑心から自ら高く止まつて居るために、上流の者も彼等を知らずじふ。

聖彼得堡の交際社會で彼等の位置は丁度新平民のやうなものだ。一番好い所で彼等の著作の名が知られて居る位だ。個人としての作家は優雅な紳士淑女間には通つて居ない。」

斯様なところを読むと、何だか厭になる……しかし又苟くも燃ゆるやうな知識上の渴を醫するに足るものは、奈様なものでも、乾いた土の上に落ちる露のやうに吸収されると言つてあるのを読むと、一種の心強さを感じないでも無い。

「新現實主義と新神祕主義の母體と彼の驚嘆した其國土と其人民とはブランドスにとつて如何に好箇の問題目であつたらう。」と譯者は言つて居るが、斯の言葉は譯者自身の上にも亦た正に當嵌るであらうと信ずる。譯書は澤山にあつても、これほどびつたりと合つた呼吸で譯出されたものは少なからう。巻頭にあるブランドスの紹介も、譯者の見識を窺ふに足りる。

日露戦争といふことを念頭に置いて斯の書を読むも亦た興味深きことである。吾儕は勢力として衝突するの止むを得なかつた程、あまりに共通な、類似な多くの點のあることを考へさせられる。近頃世上に流布する日露戦争の書物を読んで熱して居る人の頭にも、せめて斯の書を送るやうな清しい風のあることを知らせたい。もし冷靜にこの「露西亞印象記」を烈讀翫味する

ならば、その人は微笑して、「斯様な人達と戦争したのか」と言ひたくなるであらうと思ふ。

私は斯の有益な翻譯を讀者に紹介したいばかりに、思はずいろ／＼なことを言つた。「寂しき人々」の中に出て来るあの女學生は、女ながらに健氣な調子で、「私達は大局を見て進まねば成らぬ」といふ意味のことを言つて居る。日頃私達は藝術に没頭して居るけれども、時には斯ういふ書物に親しんで、廣い心をもつて見渡すことを考へたい。

障子

障子といふものは面白味の多い、好ましいものだ。雪につけ雨につけ明るくなつたり、暗くなつたりして私の心を慰める。障子は内から見て面白いばかりでなく、外から見た感じも好い。町に見つけた窓の白い小障子なども趣がある。燈火の映つたのも好いものだ。障子は紙の色の變つて行くところにも趣がある。それを張替へた時ほど室内の光景を一變させるものは無い。

忙しい手間を見つけて障子の切張をして居る時などは妙に心が落ち着く。そこへ客が訪ねて来て呉れたりなぞすると、思ひの外話が出来てうれしい。

虚偽の快感

虚偽の快感を味ふ時ほど悲しいものは無い。

柚湯

冬至の日の午後に、柚湯に入りに行くと、湯屋の番頭も一緒に入つて居て、香油でも流したやうな湯槽の中に浮いて居る黄色の柚のほひを嗅ぎながら、どうも菖蒲の方は浮いて居て賑

かだが、柚といふ奴は直ぐ沈んで了つて張合が無い、と私に話して居た。

音楽を求むる心

私の心は今、しきりに音楽を渴き求めて居る。生そのものゝ音楽を求めて居る——文學の中にも、繪畫の中にも。

深刻

深刻とは、要するに病的だといふことに歸着する。

時

『時過ぎ行くに非ざるなり、吾等過ぎ行くなり。』とは露西亞の作家の言葉である。ある時、私は家のものに向つて、吾家で今一番年を取つて居るものは何かと尋ねたら、家婢がそれは自分だと言ふから、私は壁に掛る古い時計を指して見せて、一番年を取つて居るのはあの時計だ。人間で言へば最早六七十位だ。あの時計の面に寄つて居る鏡を御覽、と話して笑つたことが有つた。私は斯の古い時計に對してもあの露西亞の作家の言葉を思出す。そして、時計が動くのは無い、吾等が動くのだといふ感じを深くすることがある。

樹木の記憶

千曲川の沿岸一帯の地域には楊樹が多い。上流には大きな雜草の叢のやうに、河に添つて一面に繁茂した場處もあるし、汎濫の爲に押流された砂や石の間に埋れた場處もある。下流へ行くと殊に眼につく。自分は粟、豆などの熟した岡の上から、遠く羊の群のやうに河岸の楊樹を望んだことがあつた。それから、寂しい雲の降る頃、ある枯枝の下を河船で通り過ぎたこともあつた。小布施の栗林は好く整理されてあつた。葉蔭の暗さ幹の黒さ、泄れ日、濕つた土の香などが思出される。豊野から中野へ通ふ道の途中で望んだ樺の杜——大木の全景。

佐久の傾斜、石垣の多い田圃側、そこに見出された木瓜。

黄葉した白樺。あの落ちて居た處は、淺間の裾にある山番の小屋に近い林の中だつた。

信州の農夫は『ドロ』を庭に植ゑることを嫌ふ。自分は根津の山村に近い谷川のほとりで、殊に木ぶりの好い『ドロ』を見つけたことがあつた。根を噛めば人が死ぬといふ毒草の生ひ茂つた水邊に、あの木が一本立つて居た。自分の眼の前には、未だにあの圓い葉がチラ／＼する。そして秋風に吹かれて、鈴のやうに鳴つて居るやうな氣がする。

西の入牧場の隣。あの邊は烏帽子が嶽の裾にある深い澤だ。天然の大牧場だ。牧牛は躑躅を食はないとかで、あの花が到る處の岡の上に咲いて居た。

野邊山が原は信州から甲州の境に接した度い高原である。あの原の一部には毎年馬市が立つ。自分は海の口村を経て、二度あの原の上にある寂しい道を旅した。一度は秋の深い時で、自分の足許から不意に鶉が舞揚つて、ヒュ、ヒュ、ヒュ、と鳴いては、やがて復たパタリ草の中へ隠れる頃のことであつた。遠く山梨の方から秣を刈集めに來る農の群もあつた。馬の嘶も聞えた。自分はあの舊道を通つて、路傍に落ちて居た木梨の實を拾つたことを今だに忘れることが出来ない。

落葉松の林の若葉。

柿は信州の山村到る處に植えてある。柿は山家のものに取つて最も親しい樹木の一つである。柿で忘れ難いのは、靈泉寺から別所へ越えた時だ。あの邊の山村には殊に柿が多かつた。

林檎も吾儕に親しい木だ。自分が山家に居た頃は、庭にあの木の蟲食つたのがあつた。幹は最早枯木を見るやうで、蟻が根元から梢まで通つて居た。その年老いた、病人のやうに立つて

居る林檎の枝から、毎年初夏の頃に成ると、可憐な淡紅色の花が垂れ下つた。蜜蜂も楽しい羽の音をさせては通つて來た。あの木はまだ枯れずにあるか。

自分は今、山の上の一地方で記憶に浮んだものを記しつけて見た。思出せばまだく澤山ある。そして、どれも忘れ難いやうな氣がする。樹木と吾儕——何といふ相違だ！吾儕のやうに見るではなし、聞くではなし、又食物を探したり相手を見つけたりする爲に動き廻る必要があるでもない。兩性を一身に具備するやうな樹木の生活には、何處に吾儕の想像の入り得る餘地があらう。それで居て吾儕は、斯の無關係な、生えるから枯れるまで一つ場處を動かずに居るやうな樹木の爲に慰められる。

斯ういふものを書いて見るにつけても、想ひ起すは少年時代だ。不思議にも幼稚な記憶は故郷の樹木と結び付いて居る。少年の自分は、母から朴の木の子葉に結飯を包んで貰つて、その香を嗅ぎながら食ふを樂みにしたものであつた。

昔の跡

芝公園の三縁亭の裏手から飯倉の方へ出やうとするところに故透谷の住んだ家があつた。周囲は樹木の鬱蒼とした谷間であつたが、今行つて見ると林は切り開かれ、谷も淺く明るくなつて、以前に見られなかつた建物などが出来、殆んどあの友人が住んだ頃の感じを留めないほどに變つた。あの故家は奈何成つたかと思ふと、坂道に面した舊い門からして改まり、内の様子も變り、小さな閑靜な住居が可成廣い家と成つて居る。あそこに友人が住んで居たのは今から十八九年ばかり前だ。私達が知つて居る場所ですら、それほど變つて了つて居る。

私の故郷の木曾には棧橋かきばしといふ名所がある。木曾谿といへば大森林の續いたところで、今でも初めて旅する人には深い山間の感じを興へるであらうが、鐵道が出来てからの木曾は沿道の樹木を工夫が切り倒した爲に以前から見ると明るく成つて居る。私は少年の時分に故郷を出たもので歸省する機會も極く少なかつたが、幾年かづつ間を置いて通つて見る度に木曾は變つて居た。まだあの谿谷が今日から見るとすつと深い感じのする頃、街道筋を歩いて通つたことが

有つた。谷が盡きたかと思ふとまた向ふの方に煙の立ち登るのが見えて、行き着いた先には石を載せた板屋根の人家があるといふ風で、宿屋でも休茶屋でも昔の木曾路のまゝであつた。その頃はまだ馬に乗つて往來する旅客の多かつた時分で、荷馬が何匹となく揃つて鈴の音をさせながら通る光景は私の眼に残つて居る。棧橋は芭蕉の古い句塚のあるところで、あの休茶屋の前の崖下のところに飼はれた猿などがあつたことを覚えて居る。木曾路を旅したもので「棧橋やいのちをからむつたかつら」といふ芭蕉の句を知らないものは無い位だが、芭蕉が旅した時分の道は何處にあつたかと聞いて見ると、すつと高い崖の上の方だつた。その時分ですら棧橋の句が残つて居るといふ名のみだつた。遠い昔のことは殆んど想像がいかないのみならず、その時分に想像して見たのと今想像して見るのとでも、大した相違がある。

これほど物象は變りつゝある。所謂名所古跡を見て失望させられるのは、わざとらしく附け加へられたものが有つたり、無いものが有るやうに脚色されて一種の見世物のやうに成つて居たりして、その間に何等の「時」の力を感じさせるものが無いからである。廢址は矢張廢址として見たい。左様いふ場所へ行くとあまり取繕はれた古跡などを見るよりも、反つて遠い昔のこ

とが忍ばれる。ある年——私がまだ二十二ばかりの青年の頃に——大和路から芳野の山奥の方へ旅したことがある。人里離れて炭焼より外に通はないやうな奥深い谷間へ出ると、そこに西行の庵といふのが遺つて居た。案内なしには一寸行かれないやうな場所だ。土地のものゝ話によると、古い庵は山火事の時に焼けて、今あるは以前の型をそっくり模して造つたものだ。とのことだ。その庵の型は西行自身に谷間から木を伐つて来て自分の手で造つたものと言ひ傳へられて居る。どうして斯様な寂しい不便なところに住むことが出来たらうと土地のものに聞くと、昔は斯の山の上の方に寺院があつて、そこから西行は通つて来たものだらうと、これも唯言ひ傳へに遺つて居る。その寺院も今は跡形は無いといふ話だつた。粗末な庵の側に立つと鳥の聲一つしないやうなシーンとしたところで、深い山氣の迫つて来るのが身にひし／＼と感ぜられたことを覚えて居る。

遠い昔の人が眞實に物を考へた場所だといふ感じのしたのは、それから三年ばかり後に、松島の瑞巖寺に近い雄島といふ小さな島にある座禪窟の跡を見た時にも、あつた。そこは幾つかの洞穴が海に面してあるだけだつた。私は古い松の枝を通して海に映る夕日の反射を望みなが

ら、その洞穴へ来て物を考へた昔の僧侶達のことを想つて見て、立ち去るに忍びなかつたことが有つた。

東坡の晩年

K先生は私が共立學校時代に英語を學んだ師の一人だ。先生が千曲川の岸へ隠れ家を造られた頃は早や花などを植ゑて老を養はうとする人であつた。その隠れ家で、先生から蘇東坡の話聞いた。東坡の晩年には遠いところへ遣られて、わびしい月日を送つたが、朝に晩に眼に映じた樹木の感化から東坡の書體は一變したと言はれて居る。先生は白い髯を撫でながら『斯の話は眞實でせうか』と附添して私に話されたことがあつた。年は取つても抑へ切れないやうな先生の雄心も思ひ合されて、斯の話は忘れ難い。

甲 武 線

甲武線に添うて市内にある小停車場は、建物としては簡便を主にしたやうなものだが、位置に變化が有つて、通り過ぎる度に飽きない心地がする。飯田町の停車場から改札口を出て石段を上らうとするところに、迫つた土手の側面と、そこに高く低く植ゑてある躑躅の樹とは、いつも眼につく。寒い日の午後には、僅かしか見えない乗客に混りながら、あの土手の躑躅の葉に薄い光の射したのを見て、それから列車の待つて居るところへ出るのは一寸他の線に無い心地だ。堀の向ふの草土手が段々高く見えて來て、四谷から先の町の建物をその上に望むのも面白い。

私が大久保に住む頃はよく、電車で飯田町から新宿の間を往復したが、用達を済して、家の方へ歸つて行くと、夕方の町々に點く灯がチラ／＼電車の窓から見えて、その度に、いかにも郊外の方へ行く氣がした。

中野から先を汽車で通る度に左様思ふが、のんびりとした地勢と耕地の續いた工合は見たばかりでも心地が好い。土の色の感じも柔かい。山の上の麥畠などは深い雲に埋れて居る頃に、こゝには残雪の塊すらなく、麥の芽の豊かに延びて青々としたのを見るも楽しい。信州あたりの耕地に思比べると、まるで庭園のやうな氣がする。野に出て麥の根を踏んで居る人達まで農夫とは思へない。園丁だ。春先降る雨の溫暖さも思ひやられる。信州に居る頃、稀にはあの山の上から降りて來て見ると、

『あゝ柔い雨が降るなあ。』

私は左様思ひ思ひしては寒い國の方へ引返して行つた。

斯ういふ楽しい土地を耕す人達のことを考へると、山の上などで骨の折れる百姓の生活を見慣れた私には、他の事ながら羨しく思はれた。それから私は信州を去り、漸く開け初めた頃の郊外に移り住むやうに成つて、附近の百姓に接して見た。一年ばかりも左様いふ人達の中に居るうちに、曾て自分が山の上で想像したとは餘程様子の違つて居ることが分つて來た。

尤も私は大久保邊のことしか知らないから、一概に東京の近郊が皆な左様だとも思はないが、私の接して見た人達で言つて見ると、純粹に獨立した農夫といふよりも寧ろ都會に向つて野菜を供給する人達——言はゞ野菜作りといふ方に近いことが分つて來た。

このことを中野に住む蒲原君に話したら蒲原君も矢張そんなやうなことを言つて居た。中野邊の人達でも百姓としての面白味は薄いといふ話だつた。

兎に角、近郊の農家の生活が色彩で言へば淡い單調なものであることは争へない事實のやうだ。一例を言へば、信州あたりの農家では同じ米の粉でもそれをいろ／＼に製することを知つて居る。米の粉を煎つて微塵粉といふものに造つて幼兒を養ふことなどをよくやる。大久保邊に來て見ると、私は殆んど左様いふ風に農家の女達が心を勞ふ場合に出遇はなかつた。

野菜や雜草の性質を諳記して居るといふ點から言つても山國の百姓は遙かに優れて見える。これには種々な關係が有らう。一方に大きな都會を控へて萬事倚り凭ることの出来る近郊の農夫は、それだけ物を掴む力を弱められて居る。

八王子といふところは何となく伊勢崎、桐生などに共通した感じがあつて、織物の市が立ち町々に梭の音の聞えるのも面白い。角喜といふ地方の宿屋としては心地の好い家がある。靜かで清潔だ。一體に女が幅を利かして居るやうな土地では、宿屋商賣をさしても上手かしら。

郡内といへば昔の甲州街道を歩いて通つた旅人には随分山道で惱まされたものだといふ。八王子の町には雪を見ない日でも、汽車である山間にかゝると、もう降り積つた雪の中だ。あの相模灘に面して暖い蜜柑島のある相模の國の一角が同じ雪の汽車路に接して居るとは、一寸想像し難い。

甲州へ入ると驛の名の發音からして特色がある。

汽車が山間の暗い隧道を通り抜けて行つて、それから遽かに甲州の谷の深く廣く展けたところへ出ると、旅客はいづれもホツとする。夏の空氣と光とを通してあの大きな谷間を望むと、雪のある日に望むとは、また別の趣がある。甲州では鹽を他國に仰ぐばかりで、その他の物は殆

んど自國で供給する。それほど勤勉な土地だ、とある人が私に話した。あの停車場で肥料のやうな物を背負つた人達が雪の積つた道をセツセと歩いて通るのを見掛けた。各所に散在する町、村落、其他一望のうちに收められる。ところ／＼に際立つて城廓のやうな構への邸宅のあるのも目につく。汽車の窓から眺めたばかりでも、何となく競争の烈しい、油断なく立働く人達の住む谷間のやうに見える。甲州の谷は、譬へば兩國の國技館の内部をうんと大きくして、天井だけ取去つたやうなものだ。あそこに誰が大きな養蠶の室を建て、こゝに誰が葡萄を栽培して居るかは、隠すところなく見渡される。

釜無川は實に荒い川だ。怒つて流れて居るやうな川だ。私は一度、信州境の野邊山が原から八つが嶽の傾斜に添うて甲州の方へ下りたことがある。あの時、高原の間を流れる釜無川の上流を見たが、すつと川上からして河原の様子が違ふ。あの河原の石が物を言つて居た。平素は斯様に干乾びたやうでも、これで一度水が出て御覽、どうして唯は置かないからと。

あの時は甲府から諏訪の間を歩いて通つて見た。葦崎から先にはまだ汽車の無い頃だつた。

秋のことで、釜無川の廣い河原には、ところ／＼の砂石の中に柳の樹がポツン／＼と立つて居て、その風に吹かれる樹葉のさまが餘計に定まりない、荒い河岸の感じを與へた。

甲州から信濃路へ入つて上諏訪の湖水へ出るあたりは、私の好きな眺望のあるところだ。雪につままれた風景を汽車から見ればそれほどにも無いが、以前歩いて通つた時は實に好かつた。鬱蒼とした樹木の間から見た秋の湖水は今だに忘れられない。

汽車で雪の深い諏訪へ入ると、何となく信州らしい感じのすることは汽車に乗つたり降りたりする人達で左様思ふ。白い毛皮の耳袋を著けた隠居が湖水のスケートの話をして、まるで鴉が飛んで居る位にしか見えなぞと言ふのを聞いても寒い國の話だとは思ふ。然し何よりも先づ心を引くものは、列車の中で見る信州人の皮膚だ。女や子供の紅らんだ頬の色ばかりとは言はない。何となく信州人の皮膚には一種の感じがある。私は以前から左様思つて居たが、今に成つて注意して見ると餘計にそれを確かめられる様な気がする。

藝術の保護

今年の春は何となくあわたゞしく暮れて行つた。種々の人のことなども思出される頃である。今日は藝術の保護といふことに就いて、胸に浮んだまゝを話さうと思ふ。

先づ彼は堀井來助といふ刀鍛冶のことから話したい、斯の人は鍛冶の方の名前を胤吉と言つて、今では最早故人である。堀井老人はもと膳所藩の抱へで、維新改革後、江州石山のほとりの鳥居川村といふ所に隠れて、百姓の鍛冶を作つて居た。ふとした縁故から、私は斯の老人のことを聞いて、あの人と連立つて其住家を訪ねた。其時は、私はまだ二十二歳の青年であつた。行くと、ボロ／＼したやうな襦袢一枚で（尤も暑い盛りではあつたが）六十餘になる日に焼けた老人が裏の畠の方から出て來た。斯の人が堀井來助であつた。それから私は老人と相識るやうに成つて、よく種々な話を聞いたが、其頃は多くの刀鍛冶が古刀の贋作をして妻子を養ふといふ時世であつた。老人の氣性としては、その贋作を快しとしなかつたから、殆んど一生獨

身で、百姓の鍛冶を作つて口を糊しながら、時に自身の製作に従事することを楽しんで居るといふ風であつた。斯ういふ草深いところに、老人のやうな面白い人が隠れて、しかもすぐれた手腕と氣魄とを具へながら、世に知られずに埋れて了ふか、それに私は心を動かされた。丁度星野君兄弟が雑誌『文學界』を起した時で、私も友人達と共に關係して居たから、私は旅で老人のことを書いて雑誌に出したこともあつた。當時の老人の生活は今だに私の眼に残つて居る。斯の老人のことを聞き込んで、手腕を振はせたいと思ひ立つた人があつた。それは故三宮氏である。で、老人は三宮氏の世話で、江州から東京に移つて來て三宮氏の邸内に住居を構へて刀を製作することに成つた。

私も旅から歸つて母と一緒に湯島の大根畠といふところに住んで居た頃、二年振で老人が私の家へ訪ねて來た。其時、老人は、『島崎さん、私は七十の年に成つて復た世に出ました』などと言つて、互に都會で邂逅したことを喜んだり、生涯の變つて來たことに驚かれるといふやうな話が出たりした。三宮氏は名高い式部官で、交際も廣い人であつたから、老人の作つた刀を朝野の紳士達の外國の公使だのに分つといふ便宜を持つて居た。氏は又、老人の製作に對して

月々四十圓づつの手當を拂つたと聞いた。ある日、私は老人を三宮氏の邸内に訪ねると、老人が日清戦争の記念に短刀の製作を依頼されたと言つて、某軍艦の鐵片を私に示したことなどもあつた。三宮氏は奈何なる風に老人を見て居たか、刀匠としての老人に奈何なる程度まで満足を与へたか、それは私はよく知らない。兎に角、老人は意志の強烈な、藝術家氣質の人であつた。刀劍が純粹の意味で藝術であるや否やといふやうなことは別問題として、斯の三宮氏が堀井老人に對する場合なども、保護の一例に數へられると思ふ。

近頃は新しい大きな劇場までも建つといふ時勢に成つて來て、富豪とか資産家とかに餘力を藝術の奨励に盡したら好からうといふやうな聲を聞くことがある。現に盡して居る人もある。大阪の住友家などは其著しい例であらう。住友家で佛蘭西遊學の美術家を助けたり、名畫の模寫をさせたり、又は大家の作品を買入れたりするといふ話は、よく耳にする。

私は住友の主人といふ人も知らず、その下には奈何いふ美術好きな人が居るかといふ事も知らないが、斯ういふ話は聞いた丈でも奥床しい。吾國で、アンリイ、マルタンの新畫を藏して居るといふ住友家などは、異數と言はねば成らぬ。只、吾儕から言つて見ると、資力豊かな人が財

を投じて藝術家を助けたからと言つて、單にそれだけで保護の實が揚るかと言ふに、必ずしも左様で無い。かの懸賞藝術の場合を考へ合せて見給へ。單なる財力のみで良き製作を得ようとするの難きことが解る。富豪、資産家にして、藝術を保護するの餘力があるとは言ひ得る。しかしながら、富豪、資産家でなければ藝術を保護することが出来ないとは考へて貰ひたくない。藝術の保護を言ふものは、あまり富豪の富、資産家の資産に重きを置き過ぎはしないか。

それにつけて、想ひ起すことがある。日蓮の遺した文章を集めたものを見ると、あの中には種々な人に宛てた書簡がある。中に佐渡へ流された頃に書いたものがある。日蓮は他宗の先達に抗して、婦女子も亦た救はれることを唱へたからであらうか、あの佐渡時代の書簡を讀むと、日蓮の爲に著物を造つて遠い孤島へ送つた婦人のことが出て居る。斯の婦人はある人の妻であつたか、あるひは尼僧であつたか、確には今記憶しないが、しかしその女らしい、厚い心づかひを考へると奈何にその一領の衣服が、頭髮鴉の如しとまで書きつけた艱苦の僧の心を勵ましたか、といふことが思はれる。私はあの婦人のことを考へると、日蓮の一生の中に、隠れた美しい逸話を讀むやうな氣がする。斯の婦人の隠れた行は宗教家に對しての尊敬から出たことで

はあるが、私は斯ういふ心を藝術の保護にも移したいと思ふ。眞に藝術を愛する心から出たものは、假令それが一領の衣服であつても、乏しきを憂ふる藝術家の心を勵ますのである。

御承知の通り、藝術の保護者として名高いのは、伊太利の古いメヂチイ家の事蹟であらう。ロオレンゾオのごとき人は偶然に生れて來たのではなかつた。メヂチイ家には代々藝術を愛重する人達が出た。恰も文藝復興の時に當つて、巨匠輩出するといふ盛んな時代である。かのロオレンゾオは、美術史に書いてあるところで見ると、名を成した大家の誘掖と保護とに勉めたばかりでなく、隠れた天才迄も見出して、左様いふ人々の仕事を助けて、今日までも残つて居るやうな優秀な作品を作らしめた。名高いボチセリのごときも、實に斯の人に見出されたといふことである。一體、ロオレンゾオは奈何なる人であつたか、吾儕は、ボチセリが描き遺した畫像に就いて、直にその人の面前に行くことが出来るやうな氣がする。をの深沈な男性の美、發揚した精神、指導する心——殊に雄々しい額、深い瞳なぞの表情を見ると、斯ういふ人にして始めて藝術家の精神を眞に了解し、藝術家の眞の友たる事が出来たのであらうと思はれるのである、ボチセリの如き畫家が斯ういふ保護者を得たといふことは、千載の一遇とも言ふべ

きである。吾儕がメヂチイ家の事蹟を読んで、その當時を想見する度に、慕はしい美しい心持を起すといふのは、單に多くの資力を惜まないで藝術家を助けたといふばかりでは無い。もし財を投じて藝術家を助けたといふことを揚げるならば、世に幾多の例を見出すことも出来よう。尊しとするところは、眞に藝術を愛し、鑑賞し、了解し、藝術家をして各自の氣質に隨ひ思ふところを盡さしめたといふところにある。

しかし斯くの如きは、何時の世、奈何なる國にも見出し得るやうな場合では無い。せめて、藝術家の爲に衣服を造る一婦人の志なりとも得させたい。藝術の保護といふことを富豪にのみ強ゆるやうな氣風を脱したい。藝術の鑑賞家は、同時に藝術の保護者であつて欲しい。これから世に出て、政治なり、實業なり、其他種々の方面に志して行く青年が、健氣にも各自藝術の保護者を以つて任ずるといふやうな、左様いふ一般の氣風を欲しい。先づその心を欲しい。

新聞紙の報道するところによれば、いよく文藝院も成立することである。願ふところは文藝のことは文藝家の責任であるといふやうな態度でなく、當局者も亦た進んで文藝家の精神を有し、眞に保護の實を擧げるやうにしたものである。私は藝術の保護といふことを政府

の事業とか資産家の仕事とかに押付けて了はないで、一般に藝術を保護するやうな氣風の興ることを望むものである。大きな保護者は尊い。しかし幾多の小さな保護者も亦た尊いと思ふ。

『三人の處女』の序

情人を愛することく、私は詩を愛し、情人に別るゝごとく私は詩に別れた。私が情人を愛するごとくと言つたは、我ながら適切であるを覺える。『新體詩人』なる名稱は曾て私等に冠らせられた荆棘冠のごときものであつた。それは實に忌まはしき嘲笑を意味し、堪へがたきほどの侮蔑を意味した。さういふ中で、私は隠すやうにして、かすゝの詩を作つた。私は又、衆人の前で自分の爲したことを指摘された時は、あだかも吾胸の底深く祕したる愛を見あらはされたやうに、思はず吾頬を染めたこともあつた。

何といふ時の推移だらう。嘲笑と侮蔑とは、無意味な喝采に變つて行つた。恐らく今日の青

年には私の斯く言ふことを眞實にはすまいかと思はるゝ程である。

今日の詩は、私にとつて、發達した舊の情人を見るが如きものである。私は別れなければ成らない時が来て別れたので、決して浮いた心で詩を捨てたものでは無いから、斯の舊い馴染に對ひ合ふ度に特別の懐しみを感ずるのである。その領域は擴大せられ、その性質は著しく豊富にせられたことを感ずる。曾て私が Miss poetry と呼んで居たものを、今では Madam poetry と呼ばねばならないやうな氣もする。

山村暮鳥君の『三人の處女』が出来た。夫人が生んだ、新しい子の一人だ。新しい香氣と、淡い柔かな呼吸とに満ちた詩集だ。斯の母子に對して、私は曾ての自分の詩の愛を喚び起すものである。それが一生の忘れがたく美しい瞬間の一つであつたことをも感ずるものである。私は又、薄暮情人を訪るゝごとくにして詩に對した曾ての自分にも勝つて、よりよく吾愛の意味を知るものである。

斯く言つたからとて、これらの事が『三人の處女』に何物をも附け加へるものでは無い。私はたゞ思つたまゝを、序にかへて、書き送るまでである。

夫人よ、詩の母よ、最後に私は貴女の『三人の處女』の爲めに祝し、猶いつまでも貴女が若くてあることを祈る。

自由劇場の新しい試み

(一) 試演前

自由劇場に就ては、私も世話人の一人であります。これを發起し計畫された小山内君が、平素持つて居らるゝ、新しい演劇上の抱負の十分の一なりとも行はるゝやうに、又かういふ新事業が刺戟となつて、演劇興行の上にも、又俳優の心の持方の上にも、看客の芝居の見方の上にも、幾らか新しい道が開けてくれゝばよいと、蔭ながら願つて居ります。

従來演劇の興行は、觀客の意に投じようとのみ勉強過ぎて、反つて人の心を引くことの甚だ

少いものに成つた。此自由劇場に於ては、人も不足で、資力といへば、會員諸君の贊助に待つより外はないが、斯ういふ中で、小山内君始め、自由劇場の中心となつて働かうと云ふ極少數の人々が、あらゆるものを犠牲にして、あらゆる困難と闘つても、斯る演劇上の新しい試みやらうと云ふのは誠に愉快な、若々しい心持がされます。又俳優としても、それに携はらうと云ふ人等は、在來の習慣とか、情實とか云ふものを捨て、何等かの活路を開いて出ようとする人々であつて、あるひは既に斯道に名を爲した人が、進んで斯う云ふ群の中に身を投げ込んで演らうと云ふ人もあると云ふことなどは、全く今までの演劇の行き方とは異なつて居ます。如何かして、これほど熱心な團體が、幾分なりとも、其素志を貫くように、此新しい演劇の事業に、興味を有する人々の助けを得させたいものです。

自由劇場で、此秋舞臺に上せようとするのは、云はゞ近代劇其物の翻譯を試みようとして居るのです。今までに、西洋の脚本をやつたことも随分ありましたが、それも沙翁の作の一部分とか、或は翻案とか、甚しきは、筋を辿るに過ぎないやうなものが演ぜられて、假令不完全ながらも、全體としての俤を傳へようと試みるとか、殊にイブセンなどの戯曲を上場すると云ふこ

とは、今までなかつたのです。凡ての點から云つて、今日完全なものを求むることは、無論出來ませんが、只よく全體を纏めたと云はれるよりも、鬱勃たるイブセン劇の新味を、幾分なりとも提出して貰ひたいと、願つて居ます、文學の方面から云つても、海外に於ける、露佛若くは獨伊等の新作物が、翻譯されて傳へられたと云ふことは、筆を執るものに取つて、刺戟を與へるばかりではなく、またそれを味ふ人々の眼をも覺したのであります。清新な外國の作物が翻譯され、又現にされて居ると云ふことは、新文學の興るに就て、大なる刺戟を與へたので、從來とは異なつた人世の取扱ひ方は何等の束縛なき物の見かた、自然の愛などを教へたので、かう思ふと劇其物の翻譯にも、之が刺戟となり、導火線ともなつて、新らしく與つて來る劇の先驅ともならうかと考へます。私が今度の自由劇場に於て、イブセンの作『ボルクマン』を上場するに就いて、望を囑して居るのは、そこにあるです。

振返つて今の時世を見れば、過去の人々が享樂した演劇音樂等は、吾儕に取つて眞に隔世の感がある。今は實に落寞たる時である。『生』を享樂すべきものゝ極めて少い時である。せめて新しい芝居の起つて來るまで——吾儕が胸一ぱいに泣いたり笑つたりすることの出來る芝居の

起るまで——西洋近代劇の忠實なる翻譯に依つて、自分等に近いものを、舞臺の上で見出さうではありませんか。

(二) 『ボルクマン』

演劇は正しい意味の藝術であらうか、もし藝術とすれば奈何なる範圍に屬するものであらうか、これは今だに私には疑問である。眞の藝術に複製したものは無い。ところが演劇に於いては、同じ事が繰返されて、昨日演じたことは今日も亦た演ずることに成つて居る。演劇は音樂の演奏に似たものである。主となるべき曲は、後にも先にも一つしか出來ないものだが、それを樂器や肉聲に活かすといふ段に成ると、何遍となく繰返すことが出来る。『オーケストラ』に於ける指揮者、芝居に於ける監督者、一は顯れ、一は隠れるが、役目としては丁度似たやうなものだ。

平田禿木君が英吉利から歸朝した際に、芝居の話が出て、其時伊太利のチヌウゼのことが話

頭に上つた。あの女優も今では舞臺を退いて、花などを植ゑ、多病な身を養つて居るさうだが、盛んに活動して居た頃には、普通の俳優のやうな器械的なことをしないで、丁度藝術家が製作に向ふやうな心で舞臺に上つたといふ。だからデュウゼの演技は、毎日別のものと言つても可い位で、よしんば同じことを繰返すにしても、決して無意味に繰返したものではなかつたとか。今だに私はあの話を忘れないで、芝居を見ると思出すが、俳優が藝術家らしい人であればあるほど、奈何しても左様なれば成るまいと思ふ。

故團十郎が晩年に、歌舞伎座で加藤を見たことがある。あの時、福助は芝翫の名を襲いで、團十郎がその爲に舞臺の上で口上を述べたが、故人云々のところへ來るとハンケチで眼を押拭つた。聞いて見ると、あの口上はすべて諳記で、毎日同じところでハンケチを取出すとのことであつた。團十郎のやうな俳優でもそんな風かと思つたら、なんだか私には舞臺の上があまり器械的に考へられて、それからは芝居を見ようといふ氣もすくなくなつた。次第に私の心は舞臺から離れた。稀に見に行くことはあつても、脚本が無視されたり、無意味な動作が喝采され

たりするのを見ると、いつでも失望した心地で歸つて來る。所詮、今の芝居は吾儕とは縁の遠いもの、斯う思つて居た。處へ自由劇場が生れた。自由劇場の第一回試演は總ての點に於いて「試みの芝居」であつた。偶像破壊者の先驅として舞臺の上に顯はれたやうなものだつた。兎も角舞臺といふものから離れて了つた私達の心を引戻して復見たいといふ氣を起させた丈でも、あの發起者達が從來の芝居とは全く別の新しい道を歩まうとして居ることが分る。

自由劇場の試演をする前に、顧問の會が開かれた。あの時、岩村透君が巴里の美術家仲間の話を始め佛蘭西の美術界を左右するものは、主義でもなく、主張でもなく、たゞ「アミイ」の力であると言つた。この「アミイ」は普通の友人の關係を通り越して、寧ろ親分子分の關係に近いものだといふことであつた。一同の話はそれから俳優の服装のことに移つた。すると小山内君が、今度の舞臺に出る役者の著付は岩村さんなぞから見たらさぞ可笑しくもあらうが、そこは「アミイ」で大目に見て貰ひたいと、斯様なことを言つたので、一同笑ひ出した。これは小山内君の機轉を利かして串談半分に言つたことだが、しかし「ポルクマン」の試演にあれ

だけの準備をすることの出来たのは、全く斯の「アミー」の力だと思ふ。和田、中澤、北、其他の諸君は、徹夜をして迄も背景を描いて今度の試演を助けた。給金を貰つて彼様な六ヶしい諳誦の多い芝居が出来るものではないと、俳優の一人が言つて居たが、實際關係者一同慾を離れての努力なればこそ、あれだけの準備も出来たと思ふ。左團次などは、丁度明治座開場中で、仁木彈正の顔を洗ふ暇もなく樂屋でボルクマンの稽古を勵んだといふ。なにしろ少數の人の集りで、経験は無し、資力は少し、唯、小山内君の所謂「生きたい」といふ意氣込一ツで舞臺へ溢れて行かうとするのだから、傍で見居る吾儕の懸念も大きかつた。私は舞臺稽古の晩には見に行かなかつたが、第一、俳優に精力が續かない。斯様も話があつて、いよゝ、二十七日の晩に舞臺を開ける迄は、皆なあれほどの芝居を豫期しなかつた。小山内君は舞臺の幕外に立つて開會の辯を述べ始めた。私は蒲原君や田山君や徳田君などと一緒に見物して居たが、そこへ柳田君が扉を開けて入つて来て、「ヤ、passionate な處へやつて来たネ」と言つたり、「僕等には斯様な時代は無かつたよ」と言つたりした。一幕目の終る頃に、岩村君、岩野君、和田君などは、發起人及び俳優の爲に祝杯を擧げようと言出した。幕が閉つてから吾儕は一緒にシャンパンを

飲んだが、其中で私の目に著いたのは北君だつた。北君は徹夜の爲に疲れたやうな顔付で、背景を書く時の服其儘で居乍ら、心から嬉しさうに祝の杯を擧げて居た。「ボルクマン」を見て、劇界の前途に新しい希望を懐くやうに成つた者は、此シャンパンを祝つた連中ばかりではあるまいと思ふ。

國民新聞記者にも私はその話をしたが、沙翁劇では爲種と科白とが別のものに成つて居る。イブセン劇では科白則ち爲種である。「ボルクマン」はエルラの訪問から幕が開けるが、あの女は何か言はうとして入つて来る。そして破壊の光景に終つて居る。

イブセンは最後まで破壊者であつた。「ボルクマン」を見て、つくづく私はさう思つた。あの晩年の作ですら圓熟はあつても、調和は無い。一步も譲つたところが無い。あれまで行つてこそ人の心も動かされる。建設といふやうなことを考へて取掛つた破壊に、昔から何物も破壊された例が無い。

有樂座で「ボルクマン」を演じた俳優が、感情で役々を取扱はうとした嫌ひのあつたことは、

従來の芝居を離れないやうな思をさせた。そのために、宗之助のグンヒルトはやゝもすると敵役のやうに成りさうに見えた。薙若のエルラも愁嘆に流れやうとした。兎に角脚本に忠實などいふことは、多くの缺點を補つて、従來俳優本位の芝居よりも確かに正しい道だといふことを思はせだ。

従來の芝居に等閑にされたことで、今度『ポルクマン』の試演に一番よく目立つたのは、舞臺上の監督の行き届いたことである。芝居の評といふと、斯のマネエジメントのことはあまり言はれないが、奈何いふ思想に導かれて俳優があそこまで行き得たかといふことをも考へて見ねばならぬ。

背景のことに就いても、國民新聞記者へ話したが、従來の芝居では金さへ多く掛ければ好い背景が作られるやうに思はれて居た。好い背景を作らうとするには唯金を掛けたばかりで出来るものでないといふことは今度の芝居が好い證據に成つた。遠近法の正しいことや、色の配合に注意したことや、光と陰との知識に富んで居たことなどは、どれほどあの舞臺上の効果を助けたか知れない。部屋に天井を張るといふことは、今日迄舞臺になかつたが、それも試みた、と

和田君は話して居た。四幕目に、二階の窓が暗くて、下の窓だけ燈火の紅く泄れた工合も好かつた。グンヒルトの部屋の中で、暖爐に火が燃て居たら、一層寒國の冬らしい感がしたらうと思つた。日常生活に起る事をあのイブセン劇に比較して見た一幕々々の感や、イブセンの會社が其時々々に應じて何程深く入つて行くかといふ事や其他今度の『ポルクマン』に就て友人同志で話して見たいと思ふ事は澤山あるが、茲には雜感を記す丈の事に止める。

演劇が吾儕日常の會話に及ぼす影響も多い。武士道とか、禪とか、其他昔から種々な教育を経て來て、吾儕は沈黙に慣らされたが、其結果は自己を表白するに拙いものと成つた。吾儕はあまりに言を卑み過ぎた。イブセン劇などが是から屢々演ぜられて、あゝいふ自由な、蔭影の多い言ひ廻しが可笑しくなく聞えて、自然とそれが多くの人の會話にも上るやうに成ると、その影響は大きなものだらう。今のところでは、吾儕は友達同志にしか通用しないやうな言葉が澤山ある。

假令原作者に近い思想感情を持たずとも、正しい方法さへ踏んで行けば、面影を傳へることは出来る。今度の『ポルクマン』はそれを證據立てた。丁度これと同じやうな風で、洋樂は一

時非常な發達を期待されたが、しかし曲の研究をおろそかにして技術ばかりが進んだ爲に、今日のやうな衰頽を招いて了つた。新しい演劇を興さうとする者に、洋樂の歴史は好い參考だ。もつと俳優に脚本を研究して貰ひたい。この次の試演には、もつと稽古を十分にして貰ひたい。そして一時の成功に安んじないで、根本から出發するやうにして貰ひたい。

其から、斯いふ芝居の興つて來た事が刺戟に成つて新しい脚本を書く人や新しい俳優や劇評家などが興つて來るといふ事に成つたら、其こそ今迄の夢は破れて行くだらう。劇界も面白い事に成掛て來た。

(三) 『出發前半時間』と『犬』

私は自由劇場で顧問の一人といふ事になつてゐるから、云はゞ内輪のものです。故に寧ろ私は中の方から見た見た今度の第二回試演の感じやら、多少自分の思ひ付いた註文やらを少し計りお話ししようと思ひます。

第二回の試演は第一回の時に比して思ひの外見物の數が多く、殆ど二日共場を満たしました

が、此れなど顧問の一人として喜ばしく思つてゐます。されば少くとも小山内君などの爲事に同情を寄せる人の多いといふ事と、一つはエデキントだの、チエホフだの、その他の人々の新しい戯曲を見たいといふ、さういふ希望が溢れてゐるといふ事が認められました。

新しい劇の運動としては、なんとなく此の二回の調子で見ると、すら／＼行き過ぎて、それ程の反對もなく、どうやら一種の流行物にでもなりはしまいか。寧ろ私共はさう思つて恐れる位であります。だから三越の呉服店へでも寄つて、歸りに此の自由劇場へ寄るといふ人が出來はしまいか。ですから、來て見て下さるお人の方からいふと、あの劇を見ろといふ事が流行を競ふといふのでなくて、成るべく不斷著のまゝで、金を使はずに來て下さるといふ事が望ましいし、演る方の俳優及び舞臺監督者の側から言つても、餘程此の際小さい成功なぞや評判などに満足しないで、眞に新しい芝居の先驅者といふ格で以て、どこでも原作の研究を怠らないやうにして欲しいのです。兎に角日本では新しい者を早く迎へ過ぎると私は思ひます。其れに又陰でけなして表で褒めるなどは難有くないから、どし／＼表面からいけないものはいけないと云ふ風に攻撃されて、新しく進まうといふものゝ立場もはつきりし、古いものを守つて

どこまでもさういふものを斥けるといふ立ち場もはつきりするやうにやりたいのです。そこであらう新しい芝居の運動などが樂に世に入れられ、迎へられさうに、大した反抗もなく認められるといふ面白い事のやうですが、其の實は劇なら劇といふものに深く根據を据ゑるといふものにならないと思ひます。

よそから今回の試演を見に來た俳優の中に、「一體に自由劇場の舞臺へ出て演ずる役者が拙い。自分等であつたら、もう少し旨く演れる」と、かう評した人があつたといふことを聞ききました。此の見に來てかういふ評をした俳優は、どういふ意味で拙いと云つたか、直接に聞いたのでないから、よくは分らないが、從來舞臺の上で旨いといはれてをる事が、丁度文章の方でいふと、只文章を綺麗に書くといふ事が旨いといはれたのではないかと思ひます。これまで文章を旨く書かうとした人が、却て技巧の末に走つてしまつたやうに、舞臺の上で旨いといふ事を狙つて行く役者は本當に演ずる人物を活かすとか、その戯曲全體の意味を本當に現はすか、さういふ事には遠ざかつて來て、只かう細い處で細工をする事になつて來たのではないかと思ひます。もし旨いといふ事が、かういふ意味で云はれたとすると、私は自由劇場の試演者に對し

ては旨いといふ事を望まないのです。たとへ拙くとも好いから少し位調子に纏まりの付かない様な破れた處があつても、大體に於いて極く忠實に人物を現はさう、私心を去つて見物のある事も忘れて、眞に其の作を舞臺の上に翻譯して見物の心に傳へるといふやうに演つて欲しいのです。どうも今までの俳優が旨いと思つたことは、寧ろその俳優の爲にならない事が多かつたのでは、なかつたかと思ひます。だから此れから進んで新しく試演をしようといふものは、物の見方、目の付け方、心の持方なぞから變つて行かなければならないと思ひます。

時事新報の記者にも話した事ですが、第一回の試演の時に比べると、今度は舞臺監督が餘程進んだかと思ひます。一回の時には、此の舞臺監督が絶えず目の前にちらついて見えるやうな氣がしましたが、今回は此の監督者を忘れて劇を見られました。つまり舞臺監督者が隠れれば隠れるほど、それだけ監督が行届いたものと思ひます。譬へていへば、好い人形使は、人形の背後に立つてをつても、見物の視線を人形にのみ集めてしまひ、見るものは目の前に人形が動くのを見ても、それを使ふ人を見ないといふわけで、丁度舞臺監督者の巧拙はこの人形使のやうなものと思ひます。

これも同記者に話した事ですが、今度の試演で、出来といふ上からいつたらば左升の作曲家ヂュウリングと左團次の地主ステパンであらうと思ひます。この二役は如何にも樂にしてをつたかと思ひます。併しかういふ新しい試みの劇として考へて見ると、缺點が多くともやはり骨の折れた左團次のオペラ役者ジェラルドオと薙若の貴夫人ヘレエネ、マロオワ、それから壽美藏の隣人の息子イワン及び秀調の地主の娘ナタリアを取るべきかと思ひます。

私が初の日に見に行つた時は『出發前半時間』の幕が開いてゐて、丁度左團次のオペラ役者が鯨丸の娘イサベル・キヨウルヌを云ひ諭して居る處でした。娘が舞臺を去ると間もなく、左升の作曲家が現はれました。左升の扮した役は如何にも適當で、見てゐても軽く樂に演じてゐるとは思はれましたが、この作曲家でも、一回の時の詩人でも、もう少し藝術家らしいプライドを欲しい。心氣沮喪してゐる中にも、他を俗物と嘲るといふやうな人物としては、どうも少し輕過ぎるやうに見えました。以前の詩人にしろ、今度の作曲家にしろ、何れもかたよつた偏屈な人達だが、左升の技藝の淡泊はどうもあゝいふ人達を現はすに邪魔をするやうな所があるやうに思はれます。この老朽な不幸な作曲家が舞臺を去ると同時に、薙若の貴夫人が現れて來

るのです。『オペラ役者もあの貴夫人だけには關係したんですね』と、たしか春浦君が云はれたかと思ひましたが、この肉慾の關係を舞臺の上に現し、最後に貴夫人の悶死に至るまでを見物の心に傳へようとした處は、この劇の中で最も意味の深い、又試みとして大膽なことゝいはねばなりません。私はあのオペラ役者と貴夫人の關係を舞臺の上に見てゐるうちに、チェホフの『ピストル』若しくはモオパッサンの『パウルの情婦』を思ひ出しました。そして肉慾より起る煩悶は、人を悶死せしむる力があるものだと思ひながら、あの劇を見て、さういふ肉慾の見方を舞臺の上に試みたものが、この『出發前半時間』ではないかと思ひました。かういふ風に肉慾を舞臺の上で取扱かつたといふ事は、從來にない事と思ひます。従つて、薙若の貴夫人も或ひはそれに對せる左團次のオペラ役者も、どうもまだ役々の現はし方が不十分ではなかつたかと思ひます。あのオペラ役者が貴夫人に子供は幾人あるかと聞く處があります。その『二人ともぼつちやまですか』といふ邊は、最辰にもし最辰にもされた人達の普通の關係ではなくて、もつとオペラ役者の方にも驚き、若くは恐の情があり、又貴夫人の方から行つても、夫も子も、女としての自分の生涯をも如何ともすることの出来ないといふ苦悶が現はれべき處かと思ひま

す。あの劇はオペラ役者の冷淡を笑ふとか貴夫人の愛措を哀れむといふ事以上に、見物があの二人と共に悶えるといふやうな感じを與へてこそ至當かと思ひます。これは私一個の解釋であります。かういふ風に今の肉慾から起る心理を重く見てこそ、此の「出發前半時間」に面白味があるかと私は考へてをります。

『生田川』は繪畫でたとへれば、裝飾畫の觀がありました。これを戯曲として見る場合には、作者は詩趣といふものに重きを置き過ぎた嫌ひはありますまいか。

從來舞臺の上で可笑味といへば多くは普通の滑稽で「ユウモア」といふものが舞臺に上つたといふ場合は、殆ど見受けた事がありません。殊にチエホフの「ユウモア」が作を通して流れる工合は名状すべからざるもので、「犬」のやうなものでも、あれを普通の喜劇風に演ずべきや否やは問題であらうと思ひます。そこがあゝいふ劇を演ずるといふ最も困難のある處かと思ひました。引つくるめて云へば壽美藏の隣人の息子も秀調の地主も普通の喜劇として演じてゐるといふ風に見えて、譯者の解釋にまでは達しなかつたものと思はれます。左團次の地主は割合に自然でしたが、壽美藏の扮装、秀調の態度などは、少し誇張に過ぎたかと思ひます。チエホ

フの「ユウモア」を舞臺の上に現はすなどは最も困難の事と思ひます。どうかして監者の努力と俳優の奮發とを以て、さういふ處まで舞臺上の藝術を進めたいものだと思ひます。

世間では一幕物といへば演し易いものゝやうに考へてをる人の方が多いやうですが、實際一幕で味を出すといふ事は却て困難だらうと思ひます。好い一幕物を演ずるの困難は、好い短篇小説を作るの困難と似たやうなものと思ひます。自由劇場の第二回の試演に於いては、兎に角この困難を試みたのであります。

私の以上述べました事は、舞臺監督者及び俳優諸君の骨折を十分に認めてをりますから好い上にも猶好くしたいといふ自分の希望を述べたに過ぎません。猶私が述べました解釋について、あゝいふ劇を見た人達の多少の参考になる事があれば幸いです。

(四) 『歡樂の鬼』第一の曉』河内屋

與兵衛』及び『奇蹟』

六月一日の晩少し蒸暑かつたが、初夏らしい楽しい時を有樂座の棧敷で送つた。自由劇場へ

行くと普通の芝居へ行つたやうな気がしない。色の變つた引幕等があるでもなく、機敷にゐても芝居見物に附物のやうな辨當等を喰ふでもなし、茶も吞まず苳も燻さず、丁度音楽會へでも行つたやうな心持で見物して居る事ができる。然し自由劇場の特別な空氣といふものがある。自然とそれが出来て行く所に面白味がある。私はあゝいふ新しい芝居を見に行くといふ樂み許りでなく、第一あの自由劇場の廊下が面白いと思ふ。あの廊下の感じは一才外の芝居とか音楽會とかでは味はれないものだと思ふ。幕間毎に出て見ると廊下ではいろんな人々にあふ。新粧した紳士淑女の風俗も見られるし、集つて来る藝術家の批評も聽かれる。樂しい苳の句がする。一幕見ではあの廊下へ出て顔合つてゐる人々の眼には、丁度ポドレルが航海の歌にある「何か新しいもの」を探すやうな光があつた。さういふ人々の中を歩き、さういふ人々と一緒に休み、又さういふ人達と一緒に新しい試みの芝居を覽るといふ事が自由劇場の變つた空氣を形造つてゐる。先づ何となく若々しい爽快な感じを起させる。

小山内君始め其他の諸氏の非常な骨折で今度で第四回の試演を重ねた。私は柳田國男君中澤臨川君等と同じ拵で見物した。長田君秋田君吉井君の新しい作が是迄外國の近代劇をのみ演じ

て居た自由劇場の舞臺に上されたといふ事は、種々な點に於て一般の看客にも多くの藝術家にも新鮮な刺戟を與へた事と思つた。翻譯でない純粹な意味の新作が舞臺に上つたといふ事は、是が始めてといふ譯ではないが、少くも私には秋田君の題にあるやうに、新しい芝居の「第一の噺」らしく感ぜられた。

『歡樂の鬼』は立體的に取扱はれた新畫に對するやうな、寫眞に近い劇の空氣の中へ私達を連れて行つた。背景の正面にある暗いガラス屏に稻妻の光が映つたり消えたりする様は、舞臺に現れた夫婦の心の空を窺はせるやうなものだつた。惜しい事には背景となる可き室の舞臺面が廣過ぎた。空虚になつた家庭の様とは言ひながら餘に室内が淋しかつた。懊惱せる法律學者に扮した左團次の藝と自覺に入らうとした美しい細君に扮した荏若の藝と相俟つて、此劇の中にある一種誇張した氣分を惹起させた。此作の中にある一種劇的な誇張した氣分、夫が新味のある舞臺上の効果を與へた。種々なる缺點があつたにも拘らず、此の効果は打消す事ができない尊いものであつたと思ふ。

『第一の噺』を見て先づ感じた事は作者の氣質だ。是は實に争れないものだと思つた。言を換

へていへば、私は此劇の作者に特有な素材を感じた。其素材は東北に生れた人でなければ見せて呉れないやうなものだつた。此の作には「歡樂の鬼」に見るやうな動作も少く、「河内屋與兵衛」に見るやうな色彩にも乏しい。眼に賭る芝居といふよりは耳で聴度いやうな芝居だ。是から來ようとする世界を豫想させるやうな音楽に近い芝居だ。眞暗な背景に點々として見えてよいやうな提灯の光が舞臺を駆抜て通つたのは少なからず此の芝居の感じを毀けたと思ふ。あの暗い舞臺面、光にうつる聲、聲にうつる光といふものを俳優が遺憾なく表すといふ事は容易であるまい。殊に私の行つた晩は電氣の應用が不十分であつたといふ事が、作者に氣の毒の氣がした。

『河内屋與兵衛』では私は先づ豊富な色彩に心を惹かれた。故人菊五郎等が型を残して置いた芝居所謂舊劇を見馴れた観客も、こゝでは同じ丁髷の假髪を冠つた人物に全く別の芝居を味はせられた。舞臺に出て來る舊時代の人物にも我々の身に近い親しさがあつた。油桶から油の浸みが出るやうな舊い／＼商人の家庭で、珍らしい舶來品を持つて來て見せる長崎の商人や、もう此家が厭になつたと言つて假寝をする與兵衛、すこ／＼消ゆるやうに引込でゆく親達にも夫夫面白い味があつた。殊に兄の心持を解するともなく解してゐるやうな妹に扮した莚若の藝は

極自然に見えた。私は舞臺の上にいる／＼な繪を見つけた、舞臺其物が美しい畫だ。長崎の商人が取出して與兵衛に見せた和蘭陀風の畫帖、ドンファンの佇む窓から見えるセルギアの夕景色、夜明方の店頭障子にうつる朝の光——あれは皆畫の中の畫だ。此芝居は終に近づくに従つて抒情詩を舞臺の上で味はふやうなものだと思つた。「歡樂の鬼」などとは違つて兩親も妹も美しい背景の裡に消えた。與兵衛一人の舞臺となつて、最後に「長崎へ」といふ若々しい聲が残つた。終へゆくほどドラマチックでなくなつたやうに私は感じた。

最後の「奇蹟」を見ると、今日の俳優許りが頭腦がなくつて、新しい作を仕活す事が出来ないといふ非難の餘りに偏頗である事を思はせる。同じ役者に依て殆ど人形のやうに動き、演ぜられた「奇蹟」の中に、私達は心持の好い舞臺面の「簡素」と、言と言との間に湧いて來る複雑な「陰影」と、作者の心から直に看客へ傳はるやうな言ふに言はれぬ「ユーモア」とを感じるではないか。是を以てしても、只俳優を責るといふ事の無理だといふ事が判る。「奇蹟」を見てゐると、思はず吾を忘れてあの不思議なお伽噺のやうな世界へ入つて行く。私達は肩を怒らしたり腕を一杯に張つたりする必要もなく、如何にも樂々とした心持で見て居られる。富も力もどうする

事の出来ない様な乞食坊主のやうな汚い、夫でゐて威嚴のある聖者アントニウスを見ると同じ作者の『侵入者』を思浮かべた。私達は子供のやうな心に歸つていろ／＼なかう不思議を感じたり、恐れたり、笑つたり教へられたりするやうな気がした、動くともなく舞臺の上の人が動き移るともなく舞臺の上の事が移つて行くのを見て、私の傍に見てゐた中澤君が『實に技巧に富んでゐますね』と言つて頻に感嘆して居られた。嘗てマートルリンクの戯曲を愛讀した柳田君の眼には此芝居は餘程深く感じを與へたらしかつた、同君は日頃好んで研究される『山人』を見るやうな眼附をして聖アントニウスを見て居られた。そしてお伽芝居でも見るやうに、あの聖者の頭が電氣の光で輝く度に『思ひきつたものだね』等と言つて居られた。赤い巾を被つて御馳走の皿を大事さうに持つてゐる老婆も、鳴の皿をつゝき掛けて食事半に卓を離れて來た人達も、聖者の脈を取つて見る醫者も、尤らしい顔附の牧師も、病院から脱出した患者を見るやうに聖者を眺めた警官も、皆普通有觸れた事をして居ながら夫れで夢のやうな世界へ私達を連れて行くところが面白い。

要するに此度の試演には幾多の改良すべき餘地があつたと思はれたに拘らず、面白く且つ有

益であつた。少し幕數が多過ぎたと思つた。其爲に人數が少く役者の手が廻りかねたやうにも見えた。然しかういふ數々の新しい作と純粹の意味に於ける翻譯劇を見せて看客の眼をあけて行かうとする主事及び舞臺監督者の苦心は思遣られる。恐らく作者に於ても幾多の不満足は感じながら此の試演に對しては發明する所が多かつたであらう。確かに私は劇界の第一の曙光を望んだやうな気がした。舞臺は我々にとつて親しい鏡のやうになつた。朝に晩にあふ人達の影も其中を通り過ぎた、是は今迄の芝居には思ひもよらない事である。

(五) 『寂しき人々』

自由劇場の試演も今度で最早五回となつた。舞臺を監督する人々にも經驗が出來、俳優も一回は一回より多くの經驗を積んだと同時に、観る方の者もそれ丈宛眼が肥えて行く譯である。第一回の『ボルクマン』を演じた時から見れば、注意の届いてゐる事や、俳優の精力を蓄へる事なぞや、いろ／＼な點で少くも進んで來た所があると共に、観る方の者にも相應の進歩がなければならぬ。今回の『寂しき人々』を観た眼で、最初の試演を思ひ出して見ても、一寸比較の出

来ないやうな気がする。一體、芝居を選んで上場すると言ふ事は、今の劇壇では割合に無難作に考へられてゐる。春の芝居にはどういふ物をやるとか、盆の興行にはどういふ狂言が向くとかいふ事は、凡そ極つて居つて、脚本を選むといふ事は、人氣に投ずる投じないといふ點では頻りに心配されるけれども、作そのものゝ價值といふやうなものなんかは、夫れ程重く考へられもせず、随分役者の意見で改造されたりする場合が多い。さういふ中で或はイブセンを出し或はチエーホフを出し、或はゴルキイ、或はハウプトマンを出すといふ事はナカナカ容易な事ではない。かういふ物を上場したといふ丈でも、そこにもう餘程骨の折れる點が存する。

是れまで試演し來つた戯曲は大抵彼地でも名の有る傑れた作に數へられる物で、且つ傑れた脚本にはそれ／＼の權威といふものが備はつてゐるけれども、それを演ずる俳優に得手不得手はあつた。ハウプトマンを演ずる俳優でも、チエーホフを演ずる事は容易でないとか、イブセンを演ずる俳優でも、メタリンクを演ずる事は難しとするかといふ風に、西洋の名のある俳優でさへ、さう何も彼も出來るといふものではないのに、兎に角あれ丈の物を吾々の前に試演として提供した事は多しななければならない。殊に今回の試演は普通でゆけば後に何か華やかな

物とか、賑やかな物とかを附加へると言ふところを、そんな事なしにやはり寂しく終つた儘で済ましたと言ふ事は、其の邊の旨意を思つて遣らなければならぬ、此芝居は『アトモスフェアの芝居』で、一人でも餘分なことをするとか、餘計に大きな聲を出すとかすれば直ぐブチコワシになつて了ふと評されてゐる位である。作者のパツシヨネートソオトと、若々しき情緒と、靜かにそしてデリケートな客觀的の觀察とが、如何にもよく織交られてゐると思ふ。湖水の見ゆる廣い廊下で食事をする所や、主人が年を取つた母親、妻君、友達の畫家、客の女學生等と一緒に卓を圍んで集つてゐる所へ蜜蜂が來て、それを皆して追拂ふといふ様だの、女學生が湖水の方から葡萄を摘んで、籠に入れて歸つて來るところ、それからまた妻君が姑と刺繍をしながら話してゐる様なぞが、吾々をしてかう田舎の大きな家庭の中へ自然と連れて行くやうな気がした。あれを見てゐると又、吾々が平生訪れる日本の家庭の、いろ／＼なドメステイックな空氣なんものが思はれる。背景にセツセツシヨンのスタイルを用ひたのも原作の獨逸風の感じがしてよかつた。背景としては今までの試演中最もよく整つた、そして芝居とよく調和したものとといふ感じがした。直線の多い窓、机椅子、其他の家具といひ、その色彩といひ、凡てによ

く調和してゐた。幾つかの窓があり幾つかの扉口があつて、いろ／＼な人が出たり入つたりしてゐる様が如何にも自然で、複雑で、今までの芝居を見慣れた人の目には變つた。新しい物に映つたらうと思はれる。

此の靜かな家庭の中に、眼に見えない混雜が起つて來た。客を厚遇するといふ事は殊に田舎の家庭なぞに於ては、我國でも外國でもさう大した變りはないかと思はれるが、その家庭を形作り出してゐる人達の中へ、女學生のアンナ、マアルが來たといふ事は既に面白い反應と矛盾とを作り出してゐる。作者は昔風の姑をして女學生に向つて「折角來て呉れた方に出て行つて下さいとは言へた事ではないのですが」と言はして居る。其の眼に見えない混雜の因をなしたものは何であるかと言へば、新しき時代が持つて來た悲しき矛盾、衝突、思想の相違である。此の芝居にはそれが一つの情熱の形をとつて現はれてゐる。と言ふのは此のアンナ、マアルなる女學生が來ないまでも、既に最早此の主人公ラツケラートとその周圍の人々との間には、心の戦ひが起らなければならぬ、男の友人にすら了解されないやうな主人公の心持は、性の異つた人達によつて了解されるといふ事は普通難しい場合である。それを此の主人公は比較的心持の近

い男の友達の中に見出されないで、チユーリヒの大學に學んでゐるといふ女學生に見出した。此の二人が夕方の方の空氣の中で窓際の所に腰を掛けて意氣相投げる如くに感じ、稚物語の情緒にまで入つて行つたといふ事が、其のライフの背景に歐羅巴——殊に新教の興つた地方に長く根ざしてゐる宗教のある事を深く思はせた。二人の間には奮闘の寂しさばかりでなく、獻身の憐れさが伴つてゐた。主人公の父親でも母親でも非常に信心深い、宗教的な、何ぞといふと神様神様と言つて、凡ての解決をそこへ持つて行つたり、或はその攝理に歸したりしようとして居るが、それに對する此の主人公と女學生の心持にも舊い時代の人とは違つた、別な宗教心の情緒とも言ふべきものがある。

風土も異り、歴史も異り、生活の背景も異つて居る吾々の國の俳優が、此の脚本にあるやうな人達の心の高潮に達してゆく様を現すといふ事は、困難な事である。それからして人情は何處でも同じである位に考へて觀て居る看客の爲に、其の味を了解させるといふ事は是も亦困難な事と思つた。かういふ事は或は無理な事かも知れない、吾々はそれを眼の前の舞臺の上に髣髴させた丈でも、今日の場合それで満足する。そして原作者が此の脚本を作つた時の心持、何

處となく若々しい所のあること、横溢せる時代の思潮——種々の事を思はせられた。書架の上だのピアノの上だのに、ダルキンその他の人の額が掛けられてあつたのも、夫等の人がこの静かな古風な、コワれて行くやうな家庭を覗いてゐるやうに思はれて面白い。

此の芝居を見てまたこんな事も思つた。女學生が主人に話し掛ける言葉の中に、吾々は大局を見て物を決しなければならぬとか、二十世紀の方から新しい風が吹いて来るやうに思ふといふ意味の言葉があるが、あの邊は二人の心が高潮にある事を感じさせた。さうして又眼に見えない時代の潮がひた／＼と吾々の胸をひたした様に思つた。然し、あの女學生は寂しい湖畔の家を離れて歸つて行つた後で、どのやうなライフを送つたらう。假にあの脚本の主人公が死な／＼いで、幾年か経つた後の生涯を引較べて見たらばどんなものであらう。寂しき人々を舞臺の上に見た感じは夜明を望む感じだ。僅かな時の間に生き、考へ、味ふ事を沁々感じさせるやうな芝居だ。あの短い時間の間に生きてゐた人達も、後になつて見れば其時に考へて置いたやうな事が必ずしも出来るとは限るまいし、又あれを書いた作者も、今ではお伽噺などを書いてそれを眺めてゐる人のやうに思はれて居る。全體として今回の試演では主人公と女學生のマアル

との意氣相投するといふ所が物足りなかつた、それが舞臺の上の主なる調子を非常に弱めはしなかつたらうかと私は思ふ。

(六) 『道成寺』と『タンタヂイルの死』

自由劇場も主事俳優及び背景畫家等の熱心で、第六回の試験を公にする事になつた。此の試演に關係する主だつた人々は、今まで、殆んど一切を犠牲にしてかゝつて居ると言つて可いくらゐだ。主な試演者は何等の物質的報酬を受けるでもなく、背景畫家とてもその通りで、主任者は自ら進んで意匠と勞力とを提供するといふ、さういふ普通の芝居には見られない心持と、協力とで成立つてゐるのだから、その點が此の試演の一回々々と人の心を牽くところで、其の出来不出来に拘はらず、何處かかう若々しい爽快な所謂芝居道の人の手に依つて成立つた芝居には見られない感じを起せさるところだと思ふ。今回の試演などは殆んど満員の盛況を呈した、それを見ても此の芝居に關係する主な人達が、物質的に酬いられるところはたとへ僅少でも、是れ程熱心な看客のあることを思へば、全く酬いられる所がないでもなからう。私は今回の試演

を帝國劇場の一階のれの廿二番といふ椅子で見物した。白いエプロンを掛た、脊の低い娘達が欣々と看客を案内するさまも、茶屋の若いものが出たり入ったりする在來の芝居とは違つて、帝國劇場式の感を與へる。一幕すむ毎に私は椅子を離れて人々の集つてゐる廊下へ出て、友達なぞと一緒に話しながら、煙草を燻すのを楽しみとした。人々の行き交ふ圓柱の傍で、「道成寺」の作者荻野君にも會つた、四月末の軟かな夜の空氣を吸つてベルの音を聞くと又席へ戻つては、舞臺の方を眺めた。

小山内君の斷りにもあつた通り、道成寺は若い人の手になつた作を、試みとして演じられたもので、世界に名高い「タンタヂイルの死」と比較される位置に立つたのは、少しく氣の毒にも又名譽とも思つた。私達は性急な氣分を持つてゐるもので其の氣質はかうして新作を見物してゐる場合にすら現はれる。斯く言へば淋しい今日の劇壇にかういふ象徴的の試みの作を提供した才分をも勇氣をも認めないやうに聞こえるけれども、マアテルリンクの作などを並べて舞臺に上されただけに、いろ／＼の事を思はせられたのであつて、もしこれが四回目の試演の時のやうに、吾國の外の作家の手になつたものと並べられた場合には、もつと外の氣分で見物した

かも知れない、兎に角此の作者に缺點とする所は、竊て私達の缺點であることを思はせられた。話はいろ／＼になるが道成寺の稽古の不十分であつたらしいのも、舞臺上の効果を薄くしたかと思ふ、試演者諸子が主事の指導の下に、急がしい手間で稽古を勵む心を思はないではないが、慾には今少し稽古の餘裕が持たせ度いと思ふ。

道成寺ばかりでなく「タンタヂイルの死」に就いても舞臺面の上で氣が著いたことを言へば、試演者諸子の顔の拵へ方が概して餘りに室内的ではないかと思つた、寂しき人々のケーテの場合にもさう思はれたが、今回などは殊に薄い光線の下で演ずるのだから、電氣の強弱といふ事を考へて、今少しそれに調和した化粧を施した方がよからうと思ふ。既に舞臺上の「觀せるもの」である以上、化粧は必ずしも狭い室内のそれに異つたものでよい。是は言ふまでもない事であるが、たとへば女に扮する人々の顔のつくりは白過ぎる、あれはもつと黄とか赤とかいふものが勝つてゐてもよくはなからうか、服装なども亦然りで、薄い電氣の光に多くの苦心が隠されて了ふやうに思はれた。

廊下へ出て此の話をした時に、丁度エリセーフ氏も居合せて「どうも日本の役者は顔の拵へ

方が下手だ、今夜などは役者の顔が白くて幽霊のやうに見える」と言つてゐた。これは看客席の方から見た實際の感だから、今後の試演の参考として聞いて貰ひたい。

看客席から聞いてゐると白の調子の一致といふ事の難かしい事をも感じた。たとへば左團次の白は第一回の『ボルクマン』以來を通じての試みであつて、少なくとも普通の室内的の會話に墮ちることを避けようとしてゐる注意は十分認められるが、何處でも息の盡きた個所で切る事が出来て、自由に抑揚をもつて夫れを言續けられるといふ特色はあるが、其の力は感ずるが、他の俳優の科白と調和しないところがあつて、強い事を心掛けたのが却つて荒く聞こえたり、單調に流れまいとして却つて不自然に聞こえたりする憾みがある。自由劇場の試みが劇壇の單調を破らうとしてゐる點の一つは、此の科白に在る。左團次が科白の上の試みは要するに試みであつて、尙幾回かの鍛錬を経なければならぬが、然し其の意氣は壯とするに足るものである。『出發前半時間』のオペラの役者に扮した時の、あの科白まはしの中には、忘れ難いものがあつた。犬の老爺に扮した時もかう樂々と聞かれた。少し強いものになるとどうも荒事に成り度がるやうな氣味があつて、なつかしみが薄い、未々研究の餘地があらうと思ふ。

俳優の舞臺に登る時の化粧其他に於ても守らぬばならぬ一定の法則といふものがある譯ではなからうと思ふ。暗い小屋の明るい小屋とは色彩を異にし、初夏の芝居と秋の芝居とは光線の受け方を異にしてゐて、それが爲に吾々は一層心を誘れるやうなものではなからうか。

『タンタデイルの死』を見て氣附いことを二三言つて見やうと思ふが、今度のマアテルリンクのものでも、以前の『奇蹟』でもさうだが、老人といふものが芝居の中で特別な位置を持つて居るといふ事が面白く思はれた。風の吹いて來る紙の上に置かれた計算のやうに、神祕的なマアテルリンクの作にはお爺さんやお婆さんが不思議な力をもつて坐つてゐる、私達はタンタデイルの死などを見て居ると、不思議な、恐ろしい世界の方へ連れて行かれるやうな、それでも猶親しみを感じるといふのは、一はアグロワアルのやうな老人が黙つて坐つてゐて、たとへ其の人が黙つて坐つて居る時でも、不思議に心を落着かせるやうな、互に人の凭かゝつて居るやうな役を勤めてゐるからである。作者は人生といふ芝居の中で、意味ある役割を老人に見つけたと言ふものである。作者は以前の『奇蹟』では、信心深く、夫れで慾の深いお婆さんを、此の『タンタデイルの死』ではアグロワアルのやうな孤ぼつちになつてしまつたやうな老人を出して

來て、それで舞臺の上に言ふに言はれぬ静かさと安心する心持と、なつかしみとを添へてゐる。此の芝居が一幕宛、極く短いものから成り立つてゐるところが面白い、場面の凡てが城といふものを離れない、夫れを巡り巡つて遠く暗い塔の上から灯の落つる所を見せ、又は城内の室の中に連れて行き、廊下にイませ、最後に誰も見た事のないといふ女王の住居らしい高い塔の上の大きな鐵の扉の前に看客の心を連れて行く。

四幕目の廊下の所で、女王の三人の侍女は暗い陰影のやうに現はれる、あれがもし東洋風の神祕といふ事を取扱ふ作者であつたら、あの場合には陰影のやうな人達が黙つて動いてゐる許りで、物を言はせまいかと思ふ。ところがあの侍女達は吾々が物を言ふやうにものを言つてゐる、自分等の心の陰影らしく思はれて來るのも、さういふ點に在るのであらう。鬼でもなく、冥界のものでもなく、恐ろしいながらもやはり現世にあるまゝの陰影だ。あの第三の侍女が扉の所に耳を聳て、「人間は何でも悟る」といふ所がある、あそこなどは何でもないのであるが、實に意味深く聞こえるのである。それから最後の幕の大きな鐵扉の前で、松蔦のイレエヌがかつみのタンタヂイルの聲に聽入るところなどは味の深いものだつた。穴のない鐵

の扉を通して、イレエヌの翳す蠟燭の灯が暗にゐるタンタヂイルの眼に明るく見えるといふあたりは、實に考深い Scene だと思ふ、一枚の鐵扉、一寸觸つて見たばかりでも、身體の氷るやうな扉——あの簡単な道具が物を言つてゐるところは、面白く感じた。手をもつて扉を敲き、鐵片を徹して接吻するといふところは、松蔦の藝も態とらしくなくつて、よくなり負せたかと思ふ。

『タンタヂイルの死』が終つた頃は夜も晩かつた、劇場の外へ出ると舞臺の上で眺めたやうな薄い月の光が地に落ちてゐた。私は薄暗い町々の灯だの、暗い人影などを眺めて、マアテルリントクの作がもたらした *reine* された藝術的氣分を胸に浮かべて歸つて來た。

文藝の生命

最早二葉亭も舊いとか、獨歩も舊いとか、透谷などは全く時代後れだとか、左様いふことが

形式的に考へられるほど無意味なことは無い。

坪内氏の『書生氣質』が公にされたのは最早二昔も以前のことであるが、丁度その頃に、あの『ビエル・エ・ジャン』の巻頭にあるモウパッサンの『小説論』が公にされて居る、驚くではないか。今日の文藝は日露戦争を一區劃として全く面目を新しくしたと言はれるけれど、その文藝の生命はずつと以前に根ざして居る。これからさき、奈何いふ盛んな『ジャパニイス、ルネッサンス』とでも言ふべき時代が假に來やうとも、その新しい文藝は矢張今日の文藝が基礎に成つて、そこから更に出發して行つた人達にはぐくまれるより他はあるまい。世間の公衆は、好きとか嫌ひとかの情で、多くその結果をのみ判断するが、左様飛び離れた文藝の芽が生じて來るやうに想像されるかと思ふと心細い。

舊いものが左様無意味だらうか。ボオは幾多の新詩人を起して居る。ドストイエフヌキイは幾多の新進作家の胸に復活して居る。

ゴゴル、ガンチャロフ、ツルゲネエフ等の作家を先驅者に持つた人達は羨むべきだ。バルザック、フロオベル、ゴンクウル等を出した國民も羨ましい。しかし透谷とか、二葉亭とか、獨

歩とかの人達は、その精神に於いて、決して彼等に劣れるものではない。舊いものを捨て、新しいものを迎へようとして、唯一圖に焦心する人もあるが、それよりは過ぎ去つた人達の遺した精神なり事業なりを忘れないで、更に開拓を續けて行く人の方が、見ても氣持が好い。

あまり概括的に文藝を語るといふことは、近頃私には興味を引かなく成つた。例へば、フォルケルトの前期自然主義と後期自然主義とを區別した如き、又、最近の『三田文學』に譯載された佛蘭西の自然主義に關する説などの如きも其である。

此較は批評の一部だ。全部とは言へない。

『遠野物語』

『遠野物語』は昨年夏、柳田國男君が花巻の奥にある遠野郷に遊んだ時、旅から携へ歸つた土産話である。

斯の物語は、全部遠い地方の傳説を集めたるものであることや、それが著者の序文にも有るやうに斯ういふ話を聞き、斯ういふ土地を見ては、人に話さずに居られないといふほど種々な興味深き事柄で充されて居ることや、簡潔で誠實な話し振りから、これに加へた評語序文、題目などが、先づ私の心を惹いた。柳田君から寄贈された斯の異色ある冊子は今私の前にある。丁度私は読み了つたところだ。そして、著者に對するやうに、斯の冊子に對して居るそのことを話さう。

著者が東北に旅して、遠野といふやうな淋しい地方で得た印象は、卷頭の序文の一節によく言ひ表してある。

柳田君曰く、昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻より十餘里の路上には、町場三ヶ所あり。其他は唯青き山と原野なり、人煙の稀少なること、北海道石狩の平野よりも甚だし……遠野の城下は即ち煙花の街なり。馬を驛亭の主人に借りて、獨り郊外の村々を巡りたり。其馬は黔き海草を以て作りたる厚總を掛けたり。虻多きためなり。猿ヶ石の溪谷は土肥えて、よく拓けたり。路傍には石塔の多きこと、諸國其比を知らず。高處より展望すれば、早稻正に

熟し、晩熟は花盛にして、水は悉く落ちて川に在り……細き田中の道を行けば 名を知らぬ鳥あり。雛を連れて横ざりたり。雛の色は黒に白き羽まじりたり。始は小さな鶉かと思ひしが、溝の草に隠れて見えざれば、乃ち野鳥なることを知れり。天神の山には祭ありて、獅子踊あり。茲にのみ輕塵たち、紅き物聊かひらめきて一村の緑に映じたり。獅子踊と言ふのは鹿の舞なり。……笛の調子高く、歌は低くして、側にあれども聞き難し、日は傾きて、風吹き、酔ひて人呼ぶ者の聲も淋しく、女は笑ひ兒は走れども、猶旅愁を如何とする能はざりき……」

斯ういふ文章を読んで、それから山の神。姥神。山男。山女。又は著者の言ふ如きマアテルリンクの「侵入者」を想ひ起させるやうな不思議な、しかも活きた眼の前の物語に對すると、ルウラル、ライフの中に混じて見出される「驚異」と「恐怖」とを幽かに、知ることが出来るやうな氣がする。

はしなくも私は獨歩君や花袋と一緒に「叙情詩」を出した「野邊のゆき」の詩人を胸に浮べた。

假令斯の「遠野物語」の著者が、「石神問答」とか、農政に關する著述とか、もしくは「銅及び云

云』の著者であつて、斯ういふ『遠野物語』のやうな冊子ですら、民族發達の研究的興味から著されるものであるとしても、猶私は斯の冊子の中に遠い／＼野の聲といふやうなものを聞くやうな思ひがする。

有體に言へば私は山の神又は山男そのものに對しては著者の有する程な比較研究の興味を持たぬ。併しながら奥深き山村若しくは荒涼たる原野の生活に結びつけて見て山の神の意味あることも知り、山男の意味あることも知る、其處に私は興味を持つ。

慾を言へば私は斯ういふ話の生れ傳はつた地方の有様を今少し詳しく知りたい。私が『遠野物語』の著者を民族心理の研究者、靈異の採集者としてよりも、觀察の豊富な旅人として見たいと思ふのはこの故である。

私の知れる限りに於ては柳田君程の旅行家は少い、又君の如き觀察力に富んだ旅行家も少ない、君の足跡は東北の奥より九州の端にまで及んで居る。君が嘗て樺太を旅して歸られた時、君の齋らした土産話は花袋君をして好個の短篇を作らしめた。私は『遠野物語』を君が土産話の第一として、更に君から旅の觀察を聞きたい。私は第二第三の『遠野物語』が種々な形で出て來

ることを希望する。

初學者のため

(一)

しばらく私は諸君と一緒に居て、諸君の作を読むことに成つた。

私は百餘篇の稿を受取つた、一通り目を通し、その中で心を引かれた作は更に讀直して見たが、未だ諸君を知悉するには至らぬ。諸君の多くは、私にとつては未知の人である。諸君の氣質、傾向、努力などは、追々と解つて來るだらう。

百餘の間には、一寸見たばかりでも、大分階段がある。進んだ考へで、物をよく受け容れるやうな氣質で試作をして居るらしい人もある。『稟才な根氣なり』とある大家も言つたが、一作の出來不出來ぐらゐで心の變らぬやうな、ナカ／＼根氣のよさ／＼うな人もある。急がば廻れで、

寫生をして居るらしい人もある。左様かと思ふと、又、中には奈何いふ積りでそんな作をして募集に應じるのか、數多い投稿者のことを見たら自分の眞面目か、不眞面目か位は、考へても解りさうなものだ、と思はれるやうな人もある。左様いふ人の心地が聞いて見たい、何故といふに、矢鱈に焦つて數を多く書くよりも、一篇でも骨折つたものを作つた方が、遙かに進路を開くではあるまいか。根氣、根氣と言つても、數多く作るばかりが根氣では無からう。矢鱈に焦るまいとするのも根氣だ。好い傾向に進んで行かうとするのも根氣だ。それから、他人の意見などは用ひないやうな人がすくなくも我を折つて、己は悪かつたと氣が附いたり、やはらかい心で物を受け容れたり、すぐれた文學の美質や長處を眞に了解するやうに成るのも、また根氣だ。

何と言つても實力を養つてかゝることだ。ミレエが言つたやうに、物は根本から觀てかゝることだ。もし左様でない、いくら數多く書いても、それが無駄な骨折に成るし、又、その人の眼の著けどころが好いと試作すればするほど進んで行かれるから。

私は自由劇場の第四回試演を見物に行つて、マアテルリンクの「奇蹟」といふ芝居を舞臺の上

に見て今更のやうに觀察の精しさといふことを感じて歸つた。御承知の通り、マアテルリンクの作を貫いたのは、普通の意味の寫實ではない。無論だ。しかし舞臺の上にはあらはれる個々の人物に就いて觀ると、信心深く、正直で、それで普通の人と同じやうに愆に深い老婆や、其他出て來る人物が、どれもこれも精しい觀察がしてある。作者は、左様いふ觀察の餘に成つた人物から、あゝいふ芝居を組立てゝ居る。作者が建てようとした建築物は神祕的なものでも、それを組立てる爲には、石や土が運んである。そこが、單に作者の氣分とか心持とかを表はさうとした作と違ふところではあるまいか、とも思つた。言ひ換へて見ると、同じ作者の氣分や心持が表はされるやうにしても、觀察の精しさが伴ふと、その作の印象は一層鮮明な、且つ簡素なものとなるのではあるまいか。

ダモンチオの小説を讀んでも、矢張左様思ふ。あの作者は不思議な美しい繪卷物を吾儕に展げて見せる。そして人間の情熱の世界へ吾儕を連れて行く。しかしその繪卷物をバラ／＼にして見ると、精しく觀察された眼、髮、微細な呼吸、活々とした血潮の通つた白い處女の手などが残る。

これは直接に諸君の小説の評では無いが、何か参考に成ることもあらうかと思つて、斯ういふ話をしたまでである。

オヤ、今夜は最早十一時だ。編輯者に約束して置いた時間は過ぎた。一々諸君の作を例に引いて、感じたことを話す時も無いから、今月は極く大體な話にして置かう。

(二)

出来不出来に關らず。すくなくも自分々々を發揮しようとして、絶えず骨折つて居る應募者の作の中で——斯うして月々読んで居るうちには、自然と一種の親みを覺えるのが出来て来る。何時でも動かすにある若木の林のやうに、ある空氣を帯びて、一群として私の眼に映するものも出来て来た。斯の選評では、私は既に形造つたものゝ枝ぶりを取るばかりでなく、地から頭を擡げた許りの貝割葉をも見つけたいと思つて居る。だから特に斯ういふ新芽があると言つてそれを推賞したからと言つて、一方に種々な作者のあることを忘れて居る譯でも無い。その作物の程度を無視して居る譯でも無い。唯、若い文學の芽といふやうなものは、ナカ／＼一朝一

夕に發するものでも無いと思ふから、斯うして氣長に読んで見て居る。透谷がまだ生きて居る時分のこと、一緒に食事をしたことがあつたが、細君が何か手造りにした料理を運んで来た。透谷はそれを褒めて、細君が勝手の方へ行つた後で、「細君に諂ふといふ必要もあるからネ、」と言つて笑つたことがあつた。透谷はよくそんな申談を言つたが、しかし正眞な申談だ。自分のことばかりも考へて居ないものゝ申談だ。稀には料理の一つも褒めて貰はねば、細君とても張合が無い。投書とても其通り、毎月々々骨を折つて、木で鼻を括つたやうな挨拶ばかりされて居ては、張合も無からうと思ふ。私は諸君に諂ふ必要も無いし、心にも無いことは言へないが、でも出来るだけ褒めようと思つて居る。同時に七年も習作を發表しなかつたといふ人の心事をも了解して貰ひたいと思つて居る。七年發表しなかつたといふことゝ、七年習作しなかつたとは大變な違ひだ。何は兎もあれ、ドシドシ書いて出るが可い。こいつは後廻しにして取つて置かう、そんなことを考へないで、その後廻しにしようといふものに取つて掛るが可い。肉薄するが可い。材料の缺乏などといふことを考へる必要は無い、文學の材料は積重ねた石炭のやうなものでは無い。それを焚いて了へば書くべきことが無くなるといふやうな、固定したもので

決して無い。

(三)

町の空気も秋らしく成つた。

諸君の作を見ると、中には何もかも書かうとするやうな心の持ち方で、やつて居る人が大分ある。眞實ならんことを欲して、反つて書かうとすることに束縛されて居る人がある。

しかし Life は何もかも書き得るほど一定したものでは無からうと思ふ。又、これを作物に表はす場合にも、ある一定した法則があつて、その法則に據らなければ作物は出来ないと云ふやうなものでも無からうと思ふ。

電車は一息に人を目的地——The end へ運んで行く。佇立し、観察し、理解する餘地すら與へない。同じ速度を以て、何物とも同じやうにしか見ることが許さない。斯の電車の窓から通り過る町々を眺望するやうな心地で、作をしたら奈何なるだらう。書かうとすることに追はれて、唯終點を指して急ぐやうなことに成りはしないか。

「どうしても好い作物は、自分の脚で自由に歩いて行くやうな心地からでなければ、生れて來ない。あるひは立ち留り、あるひは急ぎ、あるひは繰返し見、あるひは節約するだけの自由を欲しい。」

譬へば、昨日私の許へ前田君が訪ねて來た。前田君は雑誌の用事で來たのだが、その間に田山君、小川君、杉山君等の人の噂、近作の劇、小山内君の結婚、出版界の景況、その他、蒲原君の新居のことや、水道、家賃のことまで話が出た。考へて見ると、腹式呼吸とか静座とか、運動とか、まだく澤山話があつた。繪や彫刻の話もした。來年のことまで話した。極く僅かの時間に、私達は實に種々雑多の Life を話して別れたのだ。今日に成つて見ると、覺えて置く必要のあることや、其他にも忘れないで居ることもあるが、多くは忘れて行く。まだ何か話したやうで、最早思出せないこともある。實に捉へどころの無いやうな氣がする。どうしても一々隅から隅までこれを書き表はすといふことが出来よう。

「そこいらを一廻りして來て、見たことや聞いたことを正しく書き表はせれば、その人はもう作家だ。」とフロオベルが言つたとか。斯の正しく書き表はすといふこと、唯見聞したことを

書き並べるといふこととは違ふ。フロオベルなどは正しく書くといふを嚴密に思考した人だ。

若き作家の短篇

『太陽』の記者から此頃懸賞小説の選を頼まれて、種々の作を読んで見た。青年の手に成つた數多の短篇を読んで見たが、其中に『夜の歌』といふのがあつた。かう薄暗い中に、何か蒼白いものが光つてゐるやうな世界へ、連れて行かれると言つた感じを起させる作であつた。種々の人物が出て来る、そのうちに、ある人物を指して『弱者である某』といふやうな言葉が使つてゐるのを發見した。そして、さういふ言葉に遭遇つたらば、作者が描かんとした暗い、不思議な、捕捉しがたいライフといふやうなものが、さういふ固定したやうな言葉のために、読んでゆく感じを破壊された氣がした。弱者といつても其一面にはなかく種々な性格が隠れてゐる。粘り氣のある所もあれば、執拗いところもあり、いやらしく強いところもある。また強者といつ

ても、存外に脆いところ、弱い所がないとは限らない。それなのに、一概に強者、弱者とものを極めて見て了つては、物の陰影の多いライフを眞實に現はすことが出来なくなる。これは只一例に過ぎぬけれども、種々なことで丁度かういふやうに、固定して物を考へる場合が多いと思ふ。理想といふ言葉、現實といふ言葉なども、餘りに固定的に考へられて居りはしまいか。

人生の精髓

モウパッサンがフロオベルを研究した中に、かういふ面白い言葉がある。「フロオベルは、人生の意味を語らうとしなかつた。彼はたゞ人生の精髓を傳へようとしたのである」と。味はひの多い言葉ではないか。この言葉の中には、人生のある筋を語らうとしたのでないといふことは無論含まれてゐる。

情熱の畫繪

ダヌンチオの筋のないことは夥しい。全く筋のない話といふものも無いが、少くともダヌンチオの作品などは、筋を主としてはゐない。情熱の展開が繪畫のやうに讀者の胸に現はれて來る。面白いと思ふことは、ダヌンチオは其情熱を忍がくに、非常に直截な眼を以てする。アーサー・シモンズの所謂「かれの生れた土地の農夫」のごとき直截をもつて居る。だからあの華かな、雪のやうに降つて來る詩的な言葉で綴られた物語を披けても、それは單に美しい夢物語のやうな氣がしないで、寧ろ讀者のために感じるやうな、ごく簡明な感覺的のところがある。かれの作物の主人公は、たゞ己れを待ちまうけてゐる少女の方へ出掛けてゆくといふばかりでなくて、その少女の美しい、露はな手の脈を流れる血潮の音を聴きながら出掛けてゆくやうな人である。

淺草だより——(終)

大正十三年九月十四日印刷
大正十三年九月十七日發行

「淺草だより」
(定價金壹圓五拾錢)

著者 島崎春樹

著作權者 東京市日本橋區通四丁目五番地
和田利彦

印刷者 東京市小石川區關口水道町四六
茶畑菊太郎

印刷所 東京市小石川區關口水道町四六
長誠堂印刷所

發行者檢印



發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地
(電話大手五二〇・日本橋五二)
(振替口座東京一六一七)

春陽堂

◇ 書叢藝文物讀 ◇

續々刊行

肩の凝らない、リードフルな文藝——これが「讀物文藝」である。面白くて上品で、吾民族傳統の泉を汲むなかに自家に歸つたやうな懐しさを味はふことが出來よう。名人畸人の傳があれば、惡徒や美人の出没する幻想的な場面もある。或は世の表沙汰に上らなかつた祕事逸聞、或は正史に漏れた珍記録、四季の讀物として汲めども盡さぬ興が湧く。

(一) 寶永山の話 白井喬二氏著

内容 寶永山の話、湯女挿話、本朝名笛傳、月影銀五郎、九段燈と湯鳥燈、築城變、老子鐘、俱梨伽羅紋々、廣瀬水齋の諷刺、拜領陣、竹村午睡記。

(二) 夜もすがら檢校 長谷川伸氏著

内容 がつん藤九郎、殺人鬼、作手傳五左衛門、おしどり落雁、原田甲斐の子、ばくち馬鹿、立花康武、大力女の話、上野戦争逸事、名人巾着切芝節芳と三公、死人紛失、名工新造等。

(三) 宮本武藏 本山荻舟氏著

内容 宮本武藏、澤庵と但馬、赤城祭の夜、四代目八百藏、大奥の怪火、無益の怪力、お崎きつね、伊勢屋の寶物、大力金藏、はじ林の和歌、ひぼしの象骨、檢次と權明、助六助八。

(四) 相馬事件の真相 矢田挿雲氏著

内容 相馬事件、千坂光子と大隈侯

錢二十稅・錢十四圓一各價・本美版六四

◇ 書叢藝文物讀 ◇

錢二十稅・錢十四圓一各價・本美版六四

I-3617 1

久米正雄氏作

螢草

價二圓四十錢
送料十八錢

淡きうれひの螢草
かなしき失戀の青
年が、涙の中に振
るひ起つた記録。
弱けれど正しき者
の讚美、「失戀者の
聖書」と稱せらる。

菊池寛氏作

新珠

價各一圓六十錢
送料各十二錢

上中下三卷

秋の月のやうに玲
朧たる姉瞳と春の
花のやうに艶麗な
る妹都と、一は王
女の如く淑かに一
はジブシ一の娘の
如く奔放に……。

529
108

終

